

## 8 子との関係

本章では、子どもとの関係を取りあげる。用いる年齢コーホートは出生年から算出している。

### 8-1 生存している子どもの人数・属性

#### 1) 生存している子どもの人数

現在、生存している子どもの人数は、男性の回答では年齢別の特徴は顕著にはあらわれていないが、女性回答を見ると73-77歳で3人28%、4人以上10%と、3人以上生存している子どもがいるのは38%であるのに対して、女性72歳以下では子ども2人が半数以上を占めているという特徴がある。NFRJ98では、男性回答者68-72歳で子ども2人の割合は50%、73-77歳で44%、女性回答者68-72歳で49%、73-77歳で33%となっており、「子ども2人」が代表的な家族になる時期について、今回の調査結果とほぼ整合的である。

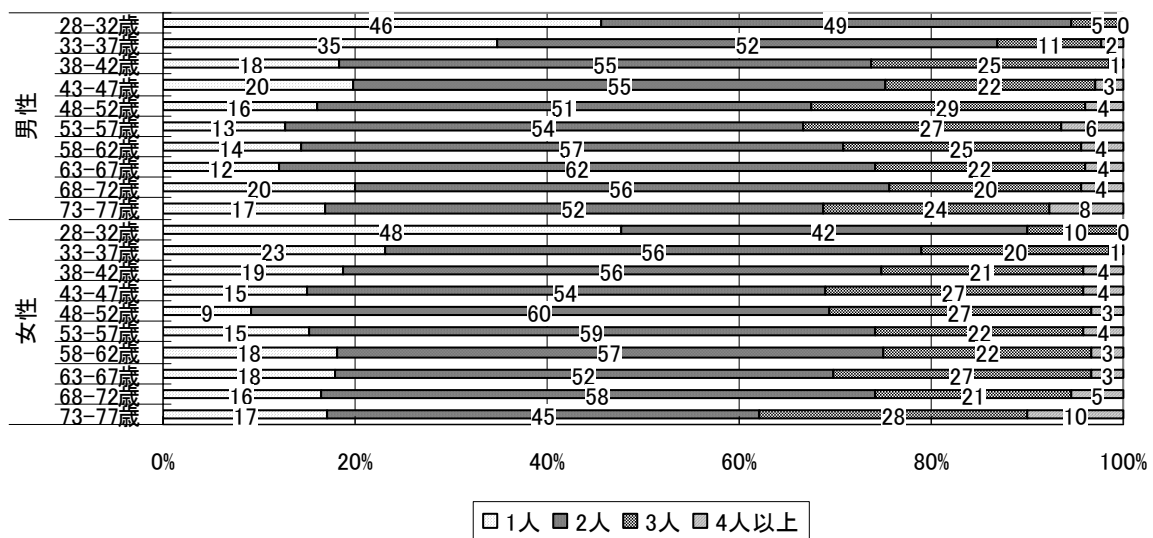


図 8-1 生存子の人数

#### 2) 生存している子どもの性別

生存している子どもの人数別に、第1子、第2子、第3子の性別を比較した。生存子数と第1子の性別との関連はみられなかった。

表 8-1 出生順位別 子どもの人数別 子どもが男性である割合 (%)

性別	出生順位	子人数	28-32歳	33-37歳	38-42歳	43-47歳	48-52歳	53-57歳	58-62歳	63-67歳	68-72歳	73-77歳
男性	第1子	1人	49	41	55	60	66	55	59	49	60	32
		2人	47	62	48	48	57	51	51	49	54	51
		3人以上	33	50	54	49	54	51	57	52	46	56
	第2子	2人	60	45	50	53	50	56	52	50	51	55
		3人以上	0	41	58	59	56	49	55	49	47	49
		第3子	3人以上	17	50	53	47	54	49	59	58	48
女性	第1子	1人	55	56	43	50	58	59	64	61	53	69
		2人	51	49	56	63	50	50	50	54	49	59
		3人以上	55	52	55	58	49	52	47	46	53	45
	第2子	2人	58	55	54	58	49	52	60	52	57	54
		3人以上	45	53	54	51	55	51	48	49	50	48
		第3子	3人以上	60	57	42	57	60	54	46	48	44

3) 生存している子どもの年齢

回答者の年齢が37歳以下ではほとんどの第1子は18歳未満、38-42歳では90%以上の第1子の年齢は18歳未満である。男性回答者、女性回答者とも、48-52歳のケースになると、20歳代が多くを占めるようになる。男女とも58-62歳で第1子が30歳代である割合が、男性回答者68-72歳、女性回答者63-67歳のケースで、40歳代の割合が50%を超える。女性回答者が73-77歳のケースでは第1子の58%が50歳代以上になっている。

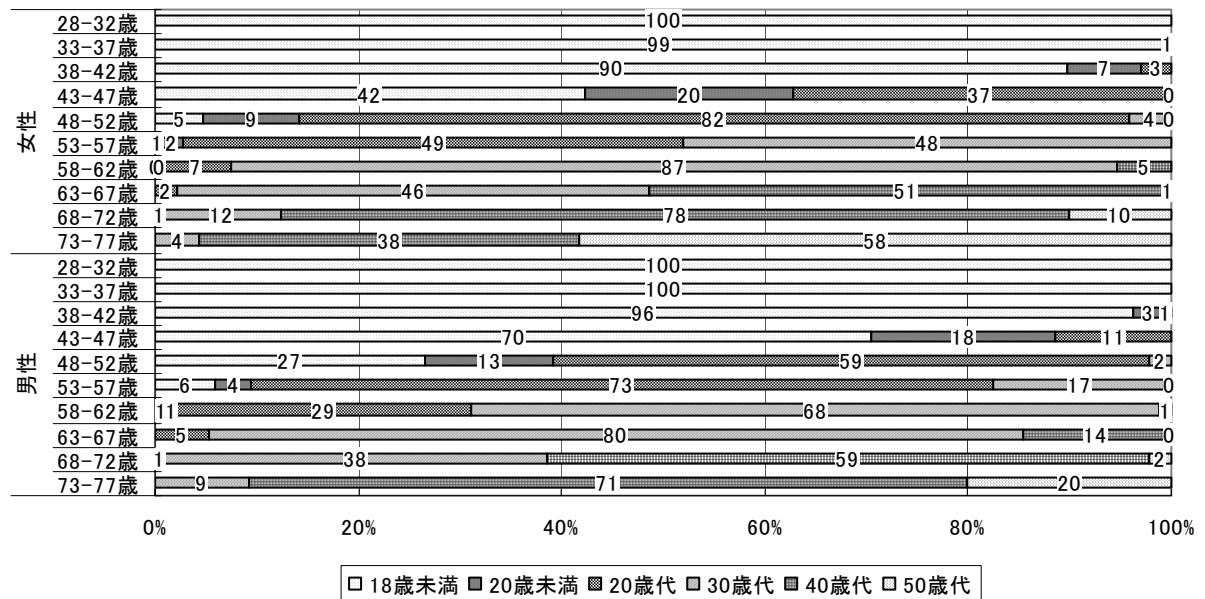


図 8-2 第1子の年齢

第2子の年齢は、男性回答者、女性回答者とも38-42歳、43-47歳でほとんどが18歳未満、20歳未満である。男性回答者53-57歳、女性回答者48-52歳のケースで20歳代が、男性回答者63-67歳、女性回答者58-62歳で30歳代が、男性回答者73-77歳、女性回答者68-72歳で40歳代が半数以上を占める。

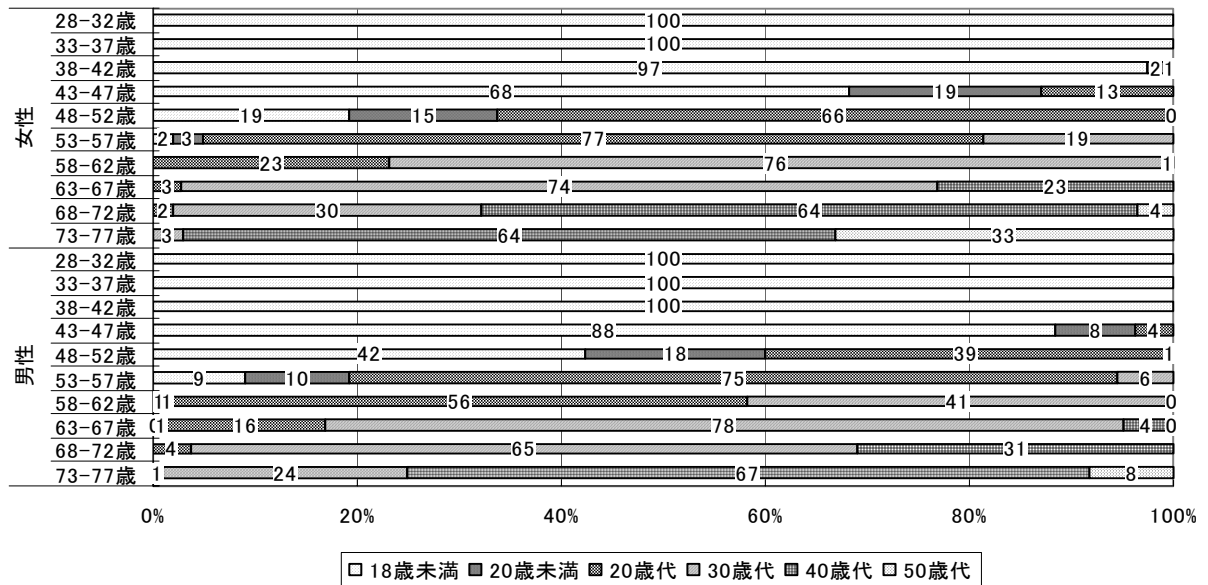


図 8-3 第 2 子の年齢

第 3 子の年齢は、男性回答者 48-52 歳、女性回答者 43-47 歳のケースでも、ほとんどの子どもが 18 歳未満、20 歳未満である。男性回答者、女性回答者とも 53-57 歳のケースで、20 歳代が半数を上回る。男性回答者 63-67 歳のケースで 30 歳代が 63%、女性回答者 58-62 歳のケースで 30 歳代は 58%、40 歳代が半数を上回るのは男性回答者 73-77 歳、女性回答者 68-72 歳のケースである。

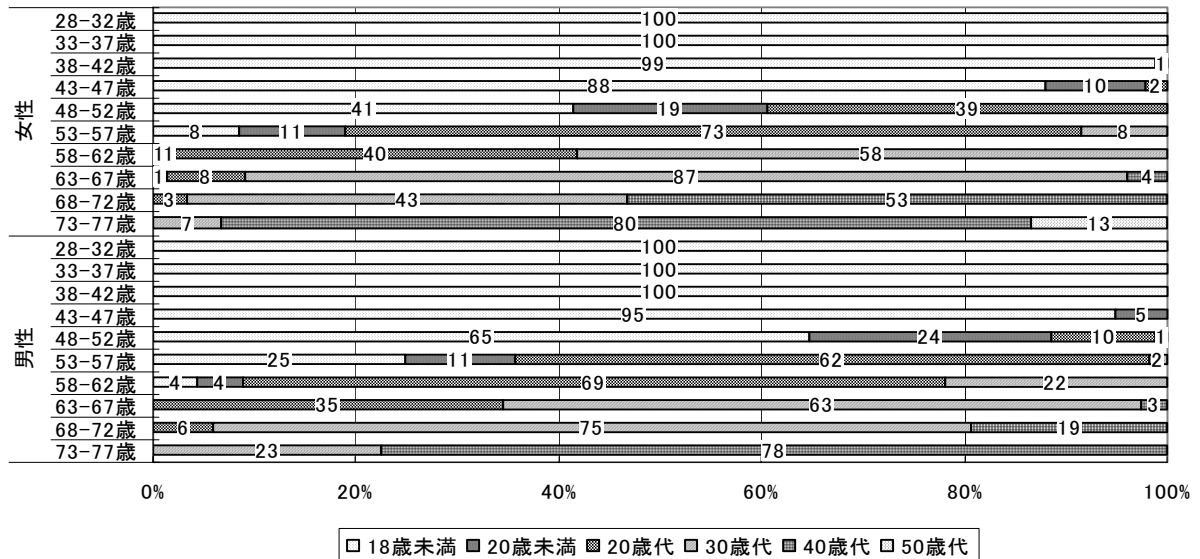
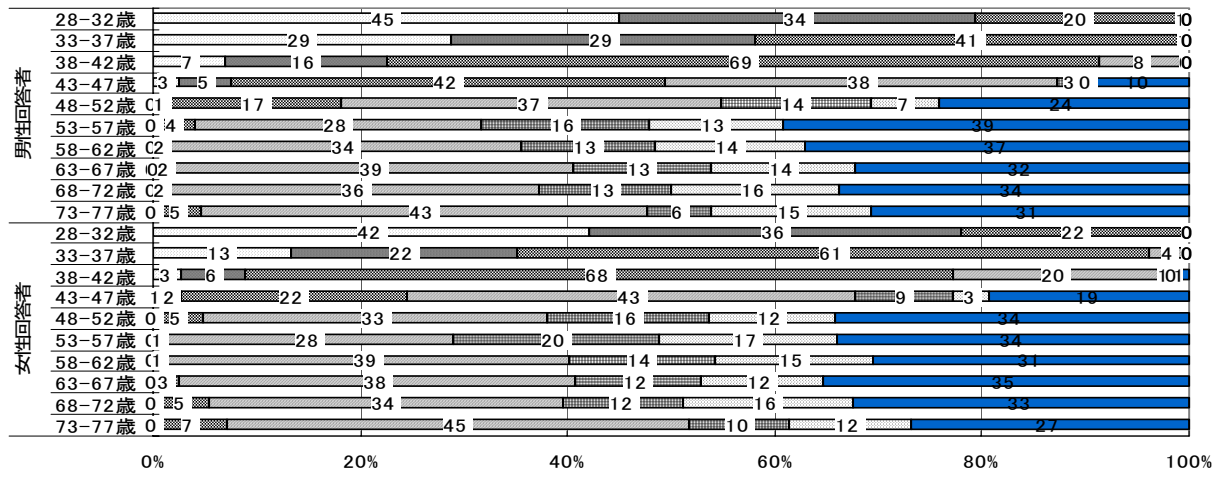


図 8-4 第 3 子の年齢

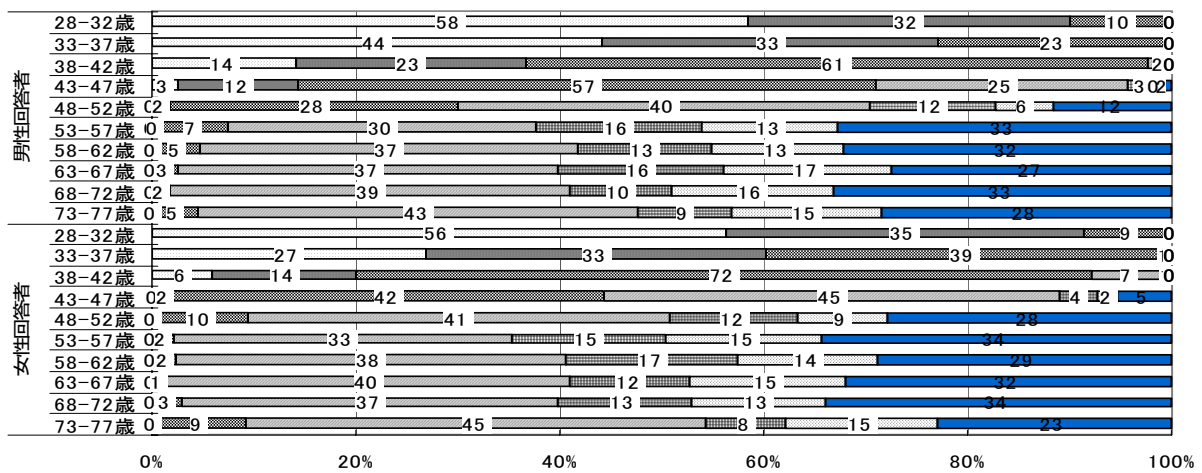
#### 4) 生存している子どもの学歴・就学状況

男性 52 歳まで女性 47 歳までは、主に就学状況をさしている。男性女性とも 73-77 歳では第 1 子の学歴は高校が 40% を超えている。それよりも若い年齢層では、専門学校、短大・高専、4 年生大学（大学院含む）の割合が上昇し、第 1 子の最終学歴が高校であるのは男女とも 53-57 歳では 30% を下回り、中学卒と合わせても 3 割程度である。



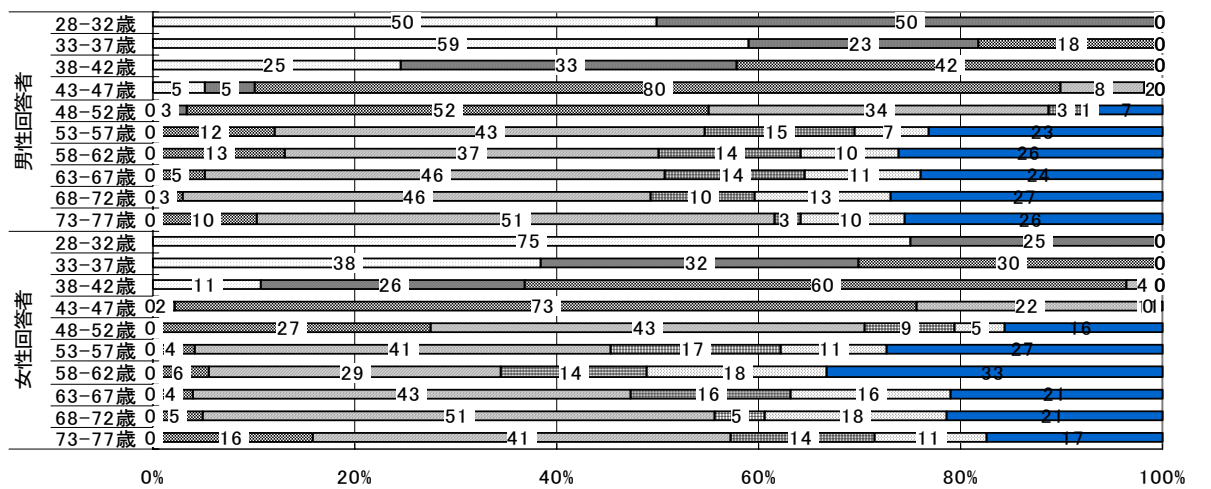
□ まだ学校に行っていない ■ 保育所・幼稚園 ▨ 小学校・中学校 □ 高校 ▩ 各種専門学校(高卒後) □ 短大・高専 ■ 大学・大学院

図 8-5 第1子の学歴あるいは就学状況



□ まだ学校に行っていない ■ 保育所・幼稚園 ▨ 小学校・中学校 □ 高校 ▩ 各種専門学校(高卒後) □ 短大・高専 ■ 大学・大学院

図 8-6 第2子の学歴あるいは就学状況



□ まだ学校に行っていない ■ 保育所・幼稚園 ▨ 小学校・中学校 □ 高校 ▩ 各種専門学校(高卒後) □ 短大・高専 ■ 大学・大学院

図 8-7 第3子の学歴あるいは就学状況

第2子、第3子にもほぼ同様の傾向が見られるが、第3子では高校卒業後の教育を受けた者の割合が低い。これは第3子というよりは、3人きょうだいの特徴である。高校卒業後の教育を受ける率はきょうだいが多いと低くなる。

表 8-2 子どもの人数別 高校卒業後教育を受けた者の割合 (%)

	0人	3人に1人	2人に1人	3人に2人	全員
1人	56				44
2人	40		23		37
3人	37	19		18	26
全体	42	5	14	4	36

## 8-2 子育て期の親の養育態度と子との関係

### 1) 親の養育態度

親の養育態度に関する調査項目は、28-47歳の回答者にのみ尋ねている。子どもに対する回答者のしつけ・養育態度について、主に3つの側面について調査した。第1に、対話的、受容的しつけ・養育態度として、「(ア) 子どもによく話しかけること」、「(ケ) 子どもの気持ちや考えを理解しようとする事」をとりあげた。第2に、子どもの自立を促すようなしつけ、子どもを統制しない養育態度として、「(ウ) 子ども自身に物事を決めさせること」、「(キ) 子どもが希望するまでは何もしないでおくこと」を、自立を阻害するような、あるいは、ルーズなしつけとして、「(オ) 子どものわがままを許してしまうこと」を取り上げた。第3に、虐待的な傾向を持つ養育態度として、「(イ) 子どもを無視すること」、「(エ) 手や体をたたいて叱ること」、「(カ) 怒って、子どもを押入れや浴室に閉じこめたり、家の外(ベランダなど)に出すこと」、「(ク) 子どもが傷つくようなことを言うこと」をとりあげた。これらはそれぞれ、ネグレクト、身体的虐待、心理的虐待に対応させている。

#### ① しつけ・養育に関する態度-対話的・受容的-

まず、「(ア) 子どもによく話しかけること」をとりあげる(図8-8)。長子年齢別にみると、男性回答者の場合は長子年齢が高いほど「よくある」と答える割合が低く、長子0-2歳では88%であるのに対して、長子16歳以上では53%と35ポイントも低い。女性回答者は長子年齢にかかわらず9割程度が「よくある」としている。

次に、「(ケ) 子どもの気持ちや考えを理解しようとする事」は、男性と女性で比較すると、女性回答者の方が「よくある」と回答している割合が高い(図8-9)。とくに、長子が16歳以上の男性回答者は、25%が「たまにある・まったくない」としている。同時期の女性回答者では、その割合は10%であり、15ポイントの違いがある。

#### ② しつけ・養育に関する態度-自立促進的・非統制的-

「(ウ) 子ども自身に物事を決めさせること」については、長子年齢が低いほど頻度が低い(図8-10)。子どもの成長とともに、頻度の高い回答をする割合が上昇している。長子が16歳以上では、女性回答者の51%が「よくある」とし、男性回答者の38%を13ポイン

ト上回っている。

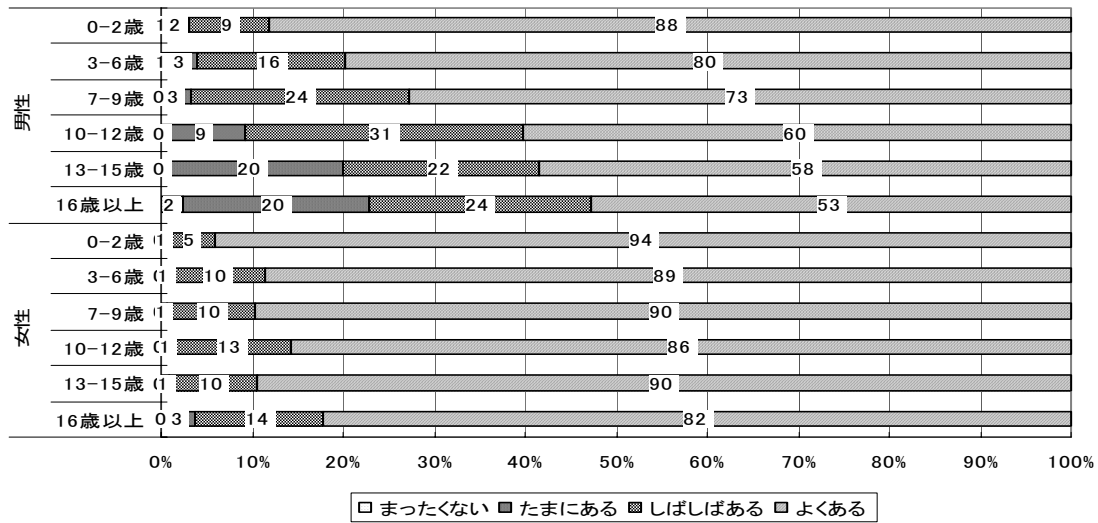


図 8-8 長子年齢別 「子どもによく話しかけること」

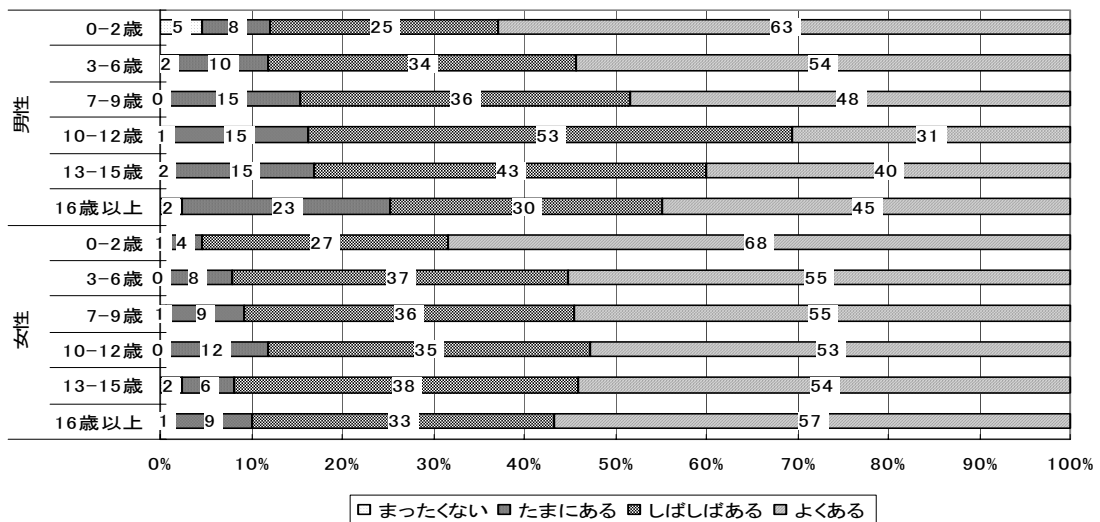


図 8-9 長子年齢別 「子どもの気持ちや考えを理解しようとすること」

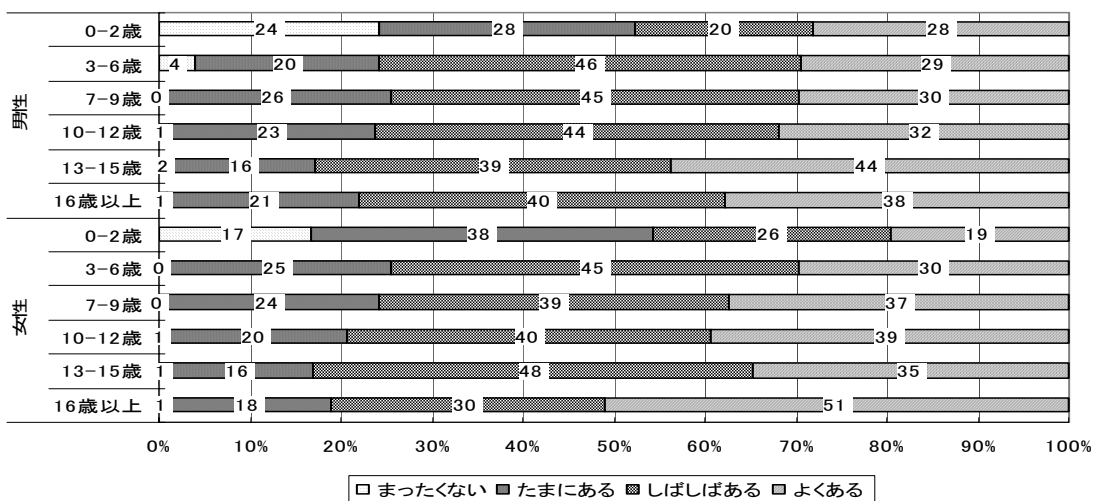


図 8-10 長子年齢別 「子ども自身に物事を決めさせること」

「(キ) 子どもが希望するまでは何もしないでおくこと」もまた、長子年齢が低いほど頻度が低く、子どもの成長とともに、頻度の高い回答をする割合が上昇している。しかし、長子が0-2歳でも、男性回答者の20%は「何もしないでおく」ことを「よくある・しばしばある」と回答しており、女性回答者の16%よりもわずかに高い。

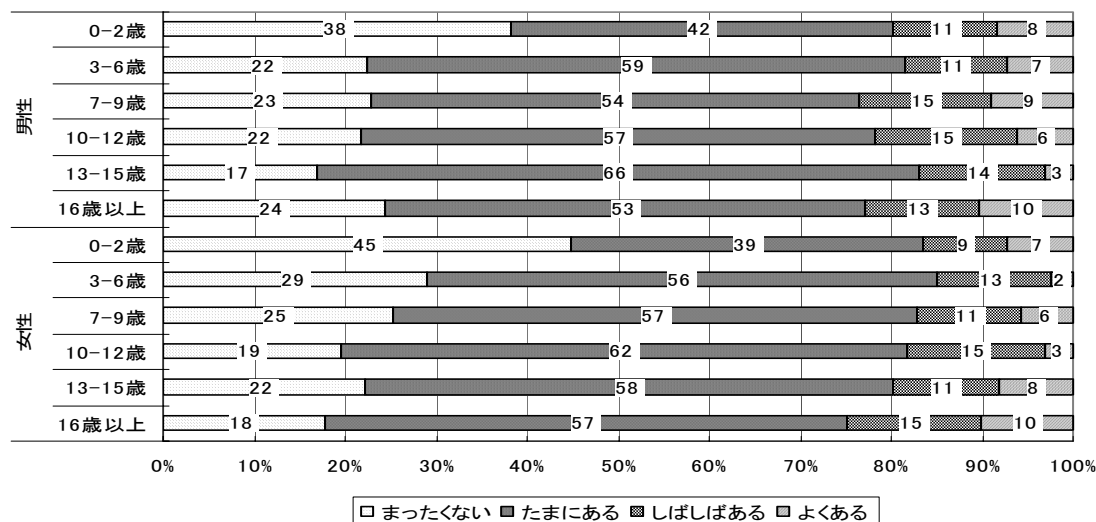


図 8-11 長子年齢別 「子どもが希望するまでは何もしないでおくこと」

「(オ) 子どものわがママを許してしまうこと」も、長子年齢が低い方が行われる頻度が高い。だが長子年齢が高くて、7割程度は「たまにある」としている。長子年齢別にみると、他の項目に比べて男性と女性の違いはあまりみられない。

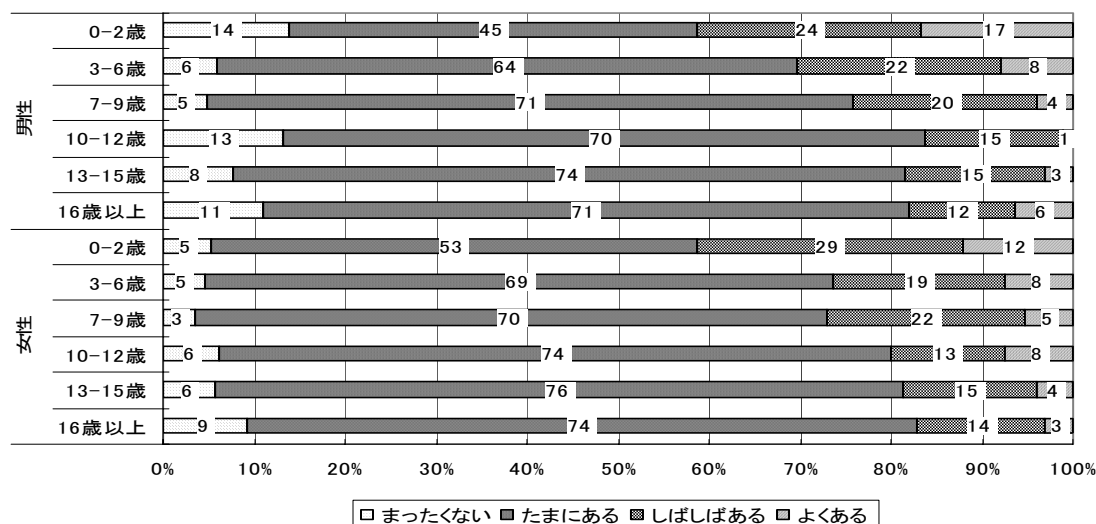


図 8-12 長子年齢別 「子どものわがママを許してしまうこと」

### ③ しつけ・養育に関する態度-虐待的傾向-

ネグレクトに対応する虐待的な傾向である「(イ) 子どもを無視すること」は、全体として、「よくある」や「しばしばある」は少ないものの、長子年齢0-2歳の女性回答者では両者を合わせて7%、3-6歳、7-9歳でそれぞれ10%である。女性回答者は男性回答者より

もその割合はやや高いが、それは女性回答者の方が子どもと接する機会が多いからではないかと考えられる。

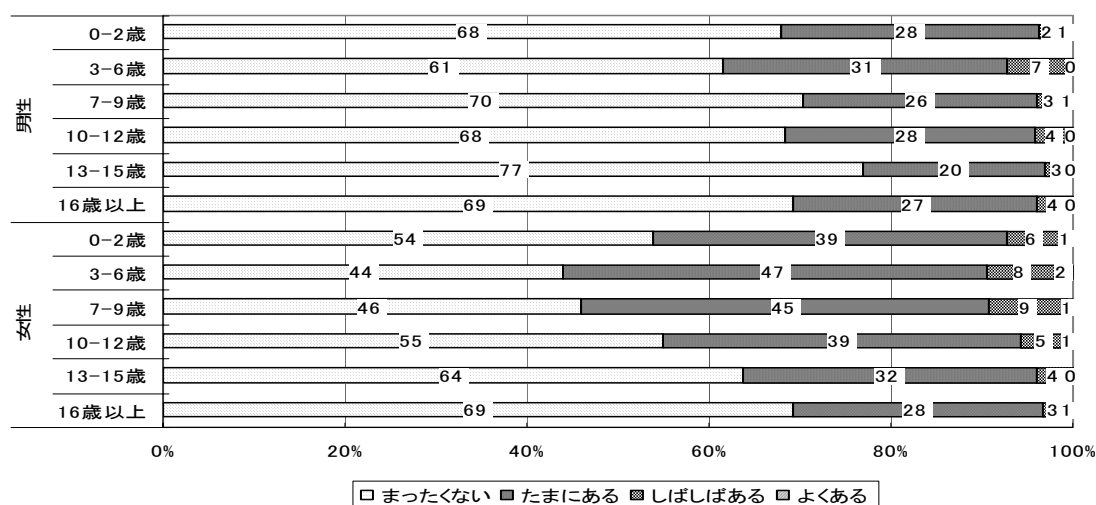


図 8-13 長子年齢別 「子どもを無視すること」

心理的虐待傾向にある「(ク) 子どもが傷つくようなことを言うこと」は、女性回答者では長子が 0-2 歳のケースで、33%が「たまにある」と回答し、3-6 歳では「しばしばある」と「よくある」を合わせると 12%、10-12 歳では 16%にのぼる。男性回答者は女性回答者に比べて、全体的に行う頻度は低い。女性回答者の回答をみると、長子が 10-12 歳でピークになっている。

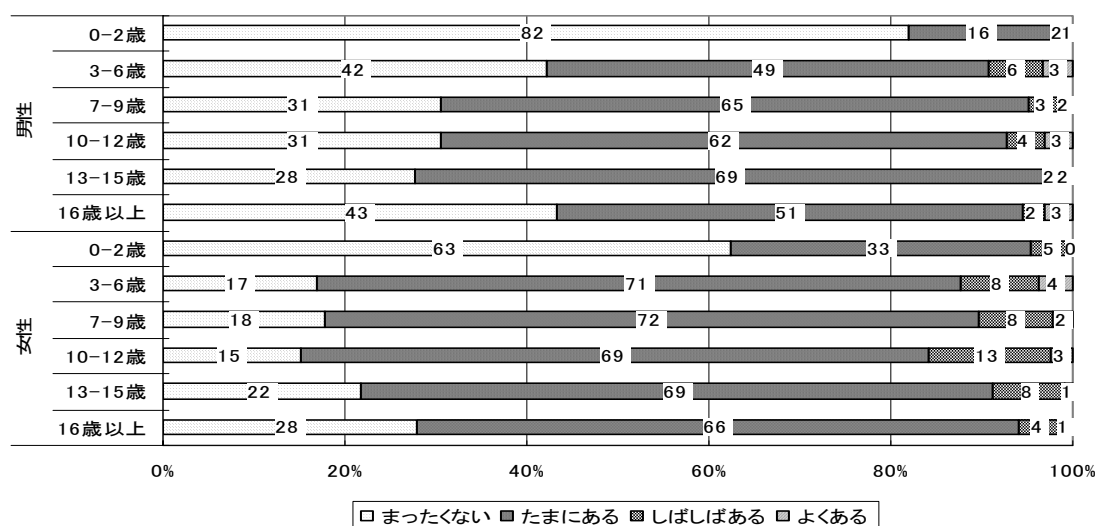


図 8-14 長子年齢別 「子どもが傷つくようなことを言うこと」

同様に身体的虐待傾向である「(エ) 手や体をたたいて叱ること」については、「まったくない」と回答している割合は高くない。「しばしばある」「よくある」とする者は、男性回答者では長子年齢 3-6 歳 19%、7-9 歳 14%、女性回答者では長子年齢 3-6 歳 31%、7-9 歳 23%にもものぼる。



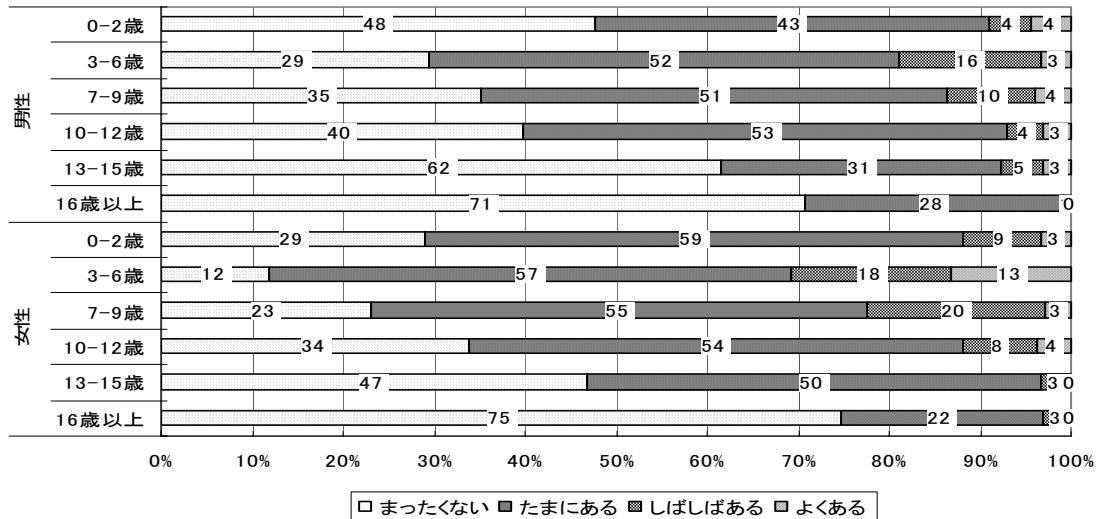


図 8-15 長子年齢別 「手や体をたたいて叱ること」

身体的虐待傾向にある「(カ) 怒って、子どもを押し入れや浴室に閉じこめたり、家の外(ベランダなど)に出すこと」については、「まったくない」という回答がほとんどを占めている。男性と女性との差もほとんどない。

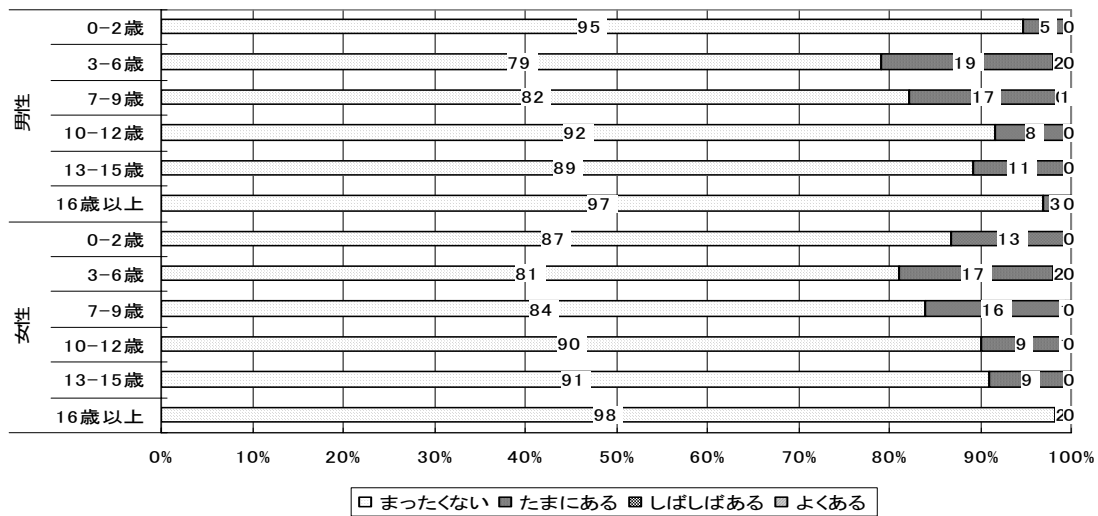


図 8-16 長子年齢別 「怒って、子どもを押し入れや浴室に閉じこめたり、家の外(ベランダなど)に出すこと」

## 2) 子どもとの相互作用

次に、回答者と第1子、第2子、第3子それぞれとの関係について、長子年齢別に遊び(「ふだん、この方と一緒に遊ぶこと(趣味、スポーツ、ゲームなど)は、どのくらいありますか。」、知識や技能(「ふだん、この方に知識や技能(勉強や料理など)を教えることはありますか。」、夕食(「ふだん、この方と一緒に夕食をとることはありますか。)」について尋ねている。

① 遊び

「ほぼ毎日」一緒に遊ぶ割合は、長子年齢が高いほど低い。男性と女性でも大きな違いがあり、例えば、第1子つまり長子が0-2歳の女性回答者はほぼ毎日遊ぶ割合が90%であるのに対し、男性では53%にすぎない。

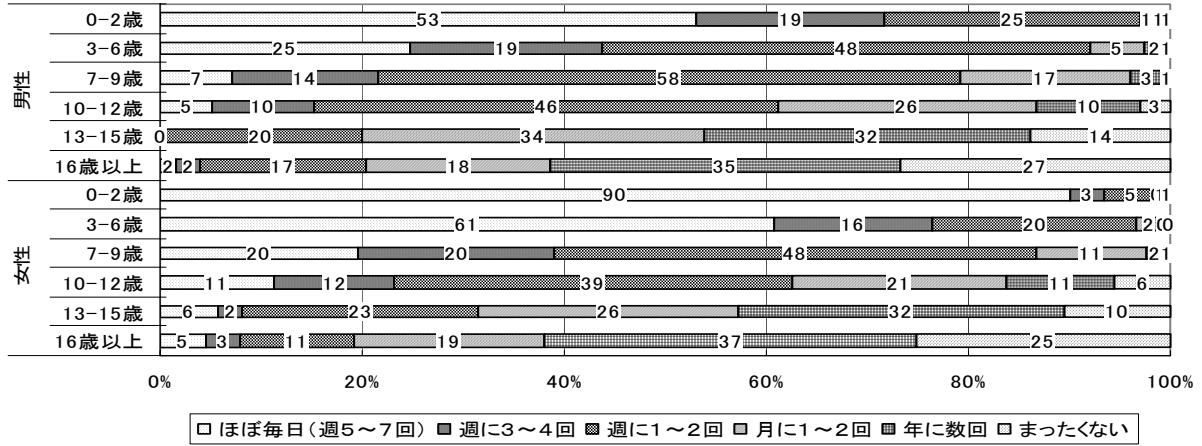


図 8-17 長子年齢別 第1子と「ふだん、一緒に遊ぶこと」

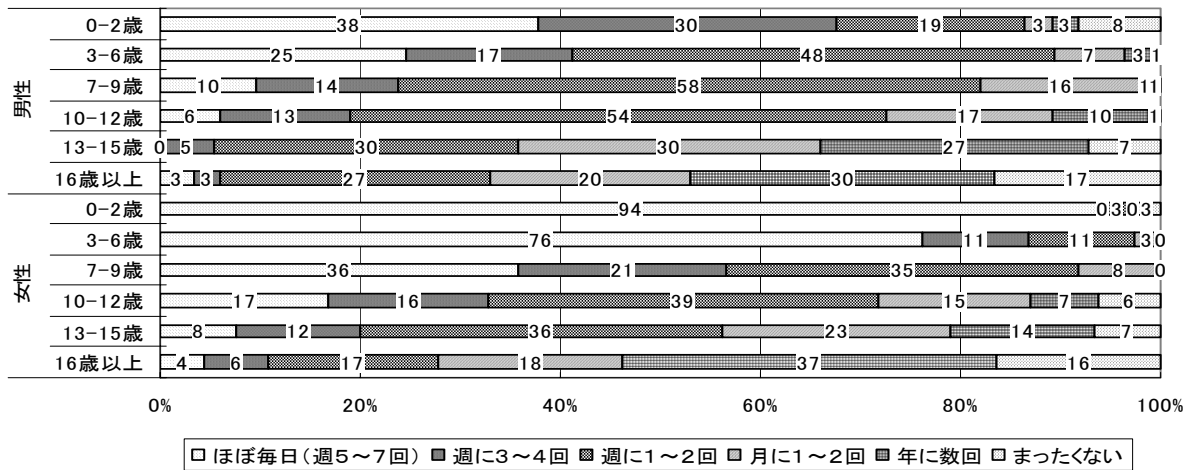


図 8-18 長子年齢別 第2子と「ふだん、一緒に遊ぶこと」

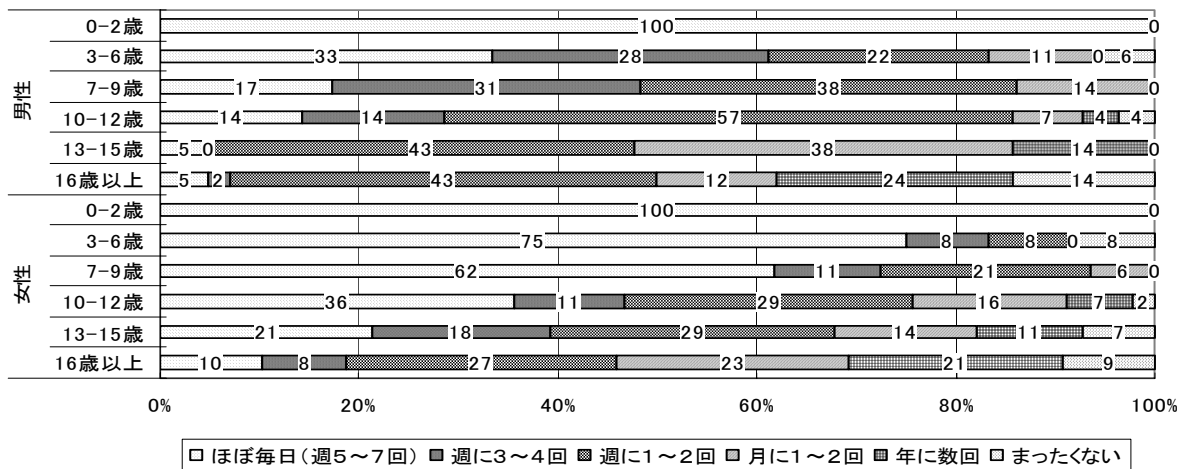


図 8-19 長子年齢別 第3子と「ふだん、一緒に遊ぶこと」

② 知識や技能を教える

男性、女性ともに長子 0-2 歳で、知識や技能を教えることは「まったくない」と回答したケースが、長子については 28%、26%にのぼるが、一方、「ほぼ毎日」の割合も高い。それ以降の年齢では、長子年齢が高いほど知識や技能を教える頻度は低くなる。男性回答者は長子が 13-15 歳という義務教育年齢であるにもかかわらず、18%が「まったくない」、34%が「年に数回」、女性回答者でも、それぞれ 8%、27%となっている。

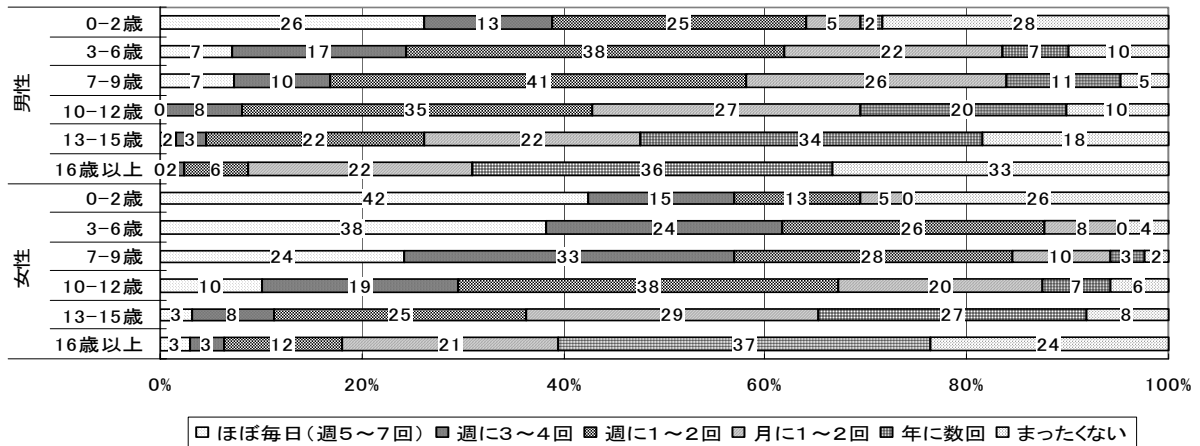


図 8-20 長子年齢別 第1子に「知能や技能を教えること」

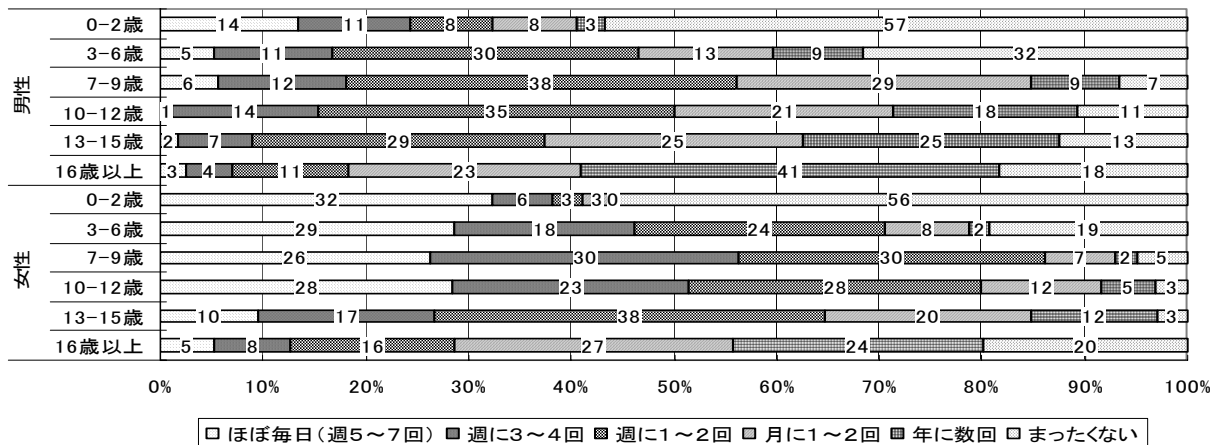


図 8-21 長子年齢別 第2子に「知能や技能を教えること」

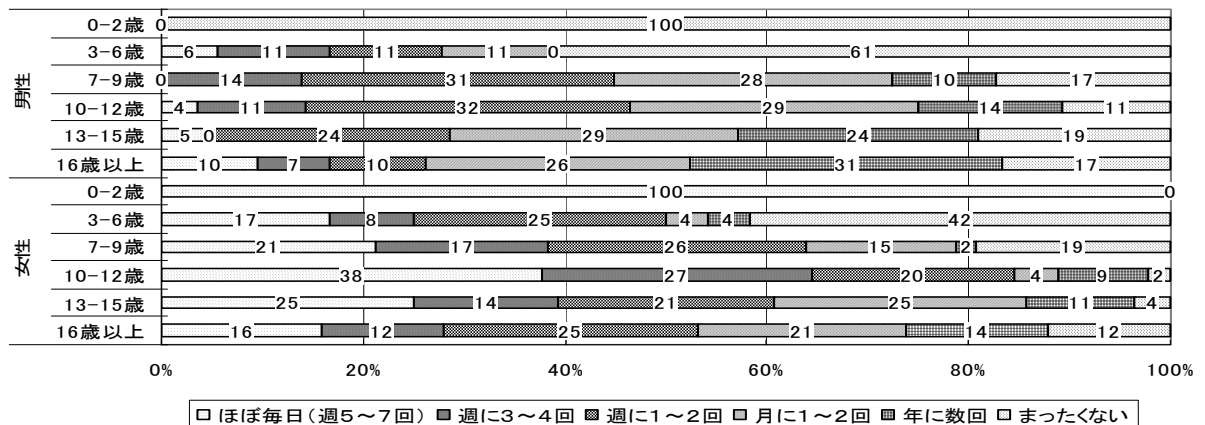


図 8-22 長子年齢別 第3子に「知能や技能を教えること」

③ 夕食

長子についての回答を見ると、女性回答者が「ほぼ毎日」一緒に夕食をとる割合は、長子が9歳までは9割以上だが、その後徐々に低下する。男性回答者も同じ傾向にはあるが、「ほぼ毎日」一緒に夕食をとる割合が最も高い長子0-2歳のケースでさえ48%にとどまっている。

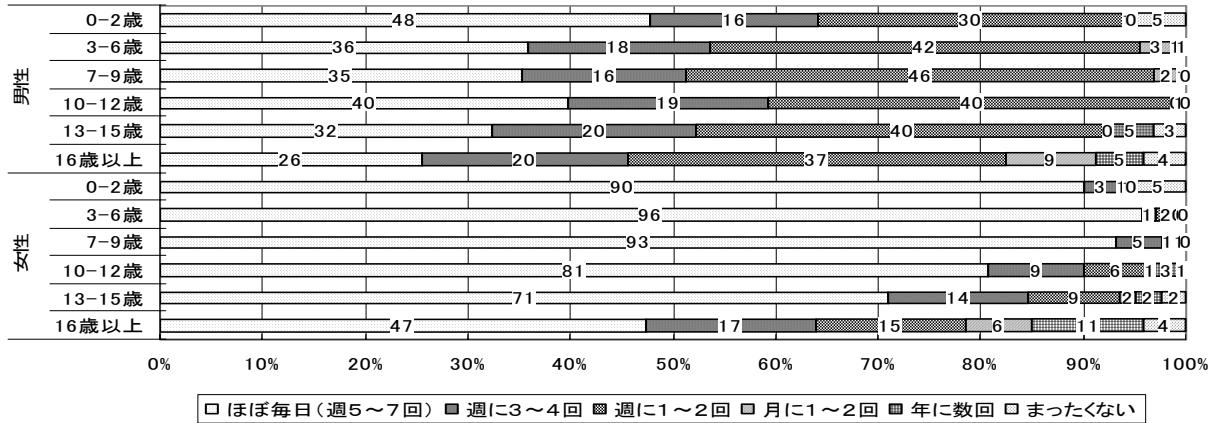


図 8-23 長子年齢別 第1子と「ふだん、一緒に夕食をとること」

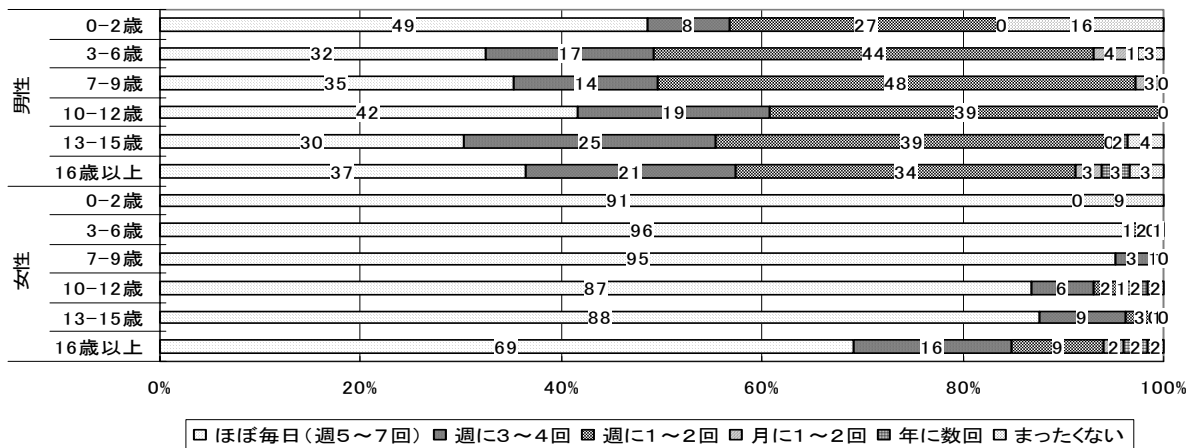


図 8-24 長子年齢別 第2子と「ふだん、一緒に夕食をとること」

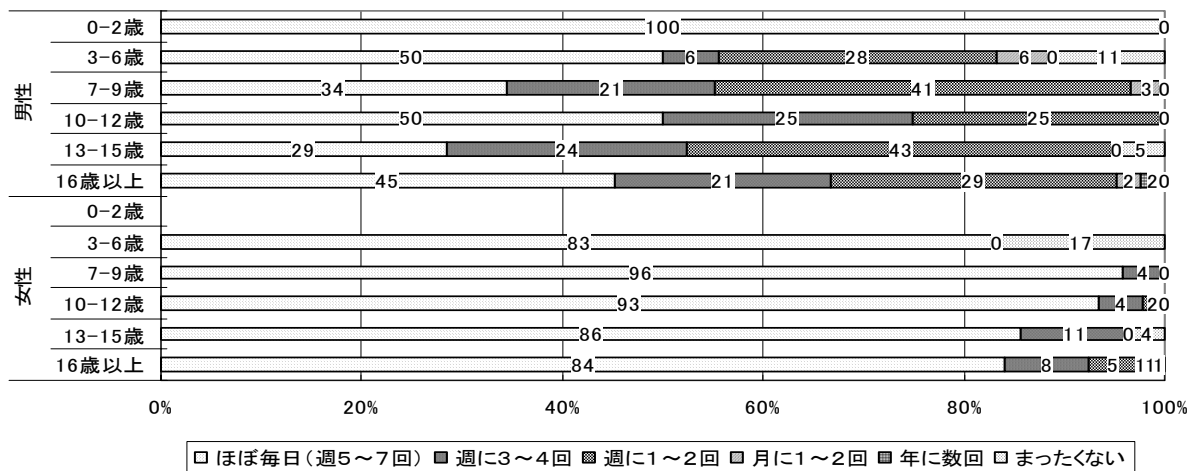


図 8-25 長子年齢別 第3子と「ふだん、一緒に夕食をとること」

### 3) 子どものトラブル

子どもの大きな問題やトラブル（病気、ケガ、学校の問題など）の有無については、6割～8割がなかったとしているが、「まれにあった」との回答も少なくはない。回答者の性別による違いはないことから、子どもの大きな問題やトラブル経験の認知に関して、多くの場合、父親と母親の間で違いは少ないといえるだろう。

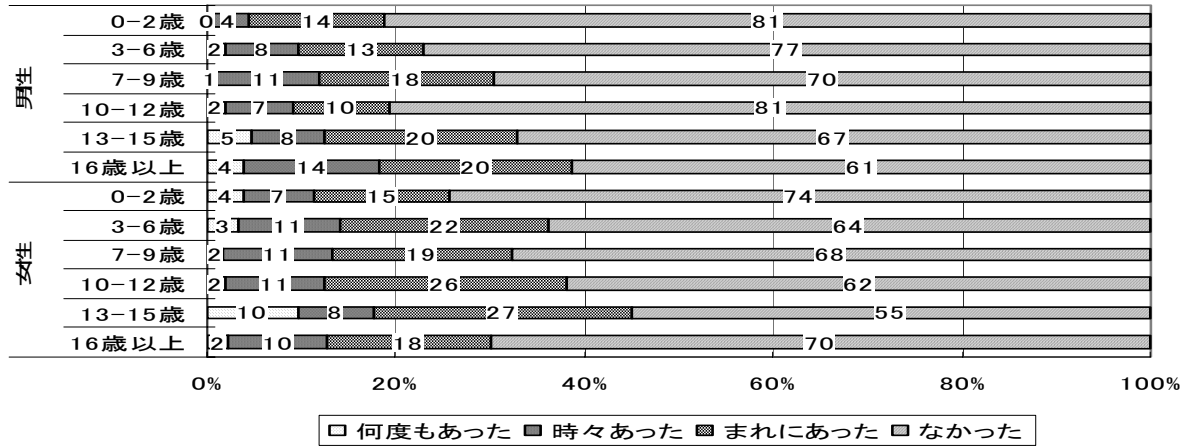


図 8-26 長子年齢別 第1子の「大きな問題やトラブル」

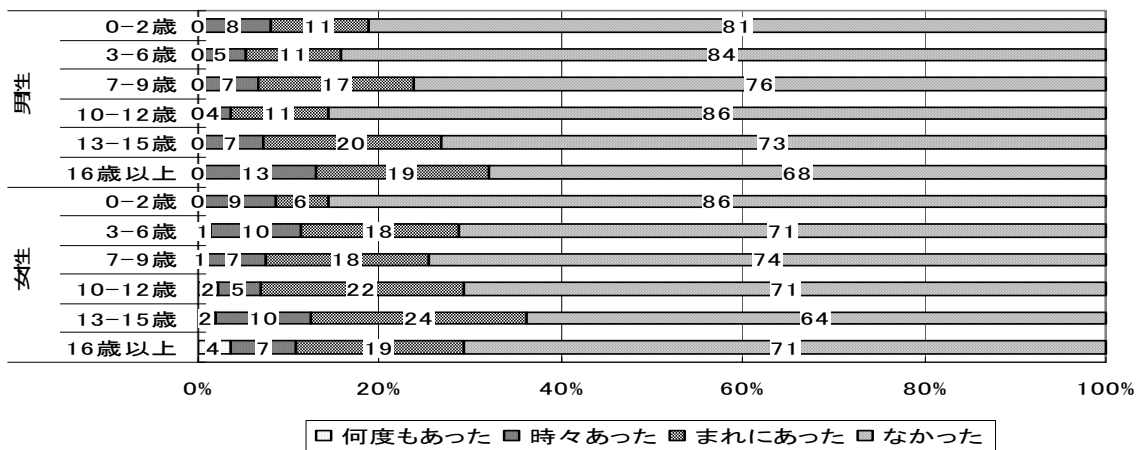


図 8-27 長子年齢別 第2子の「大きな問題やトラブル」

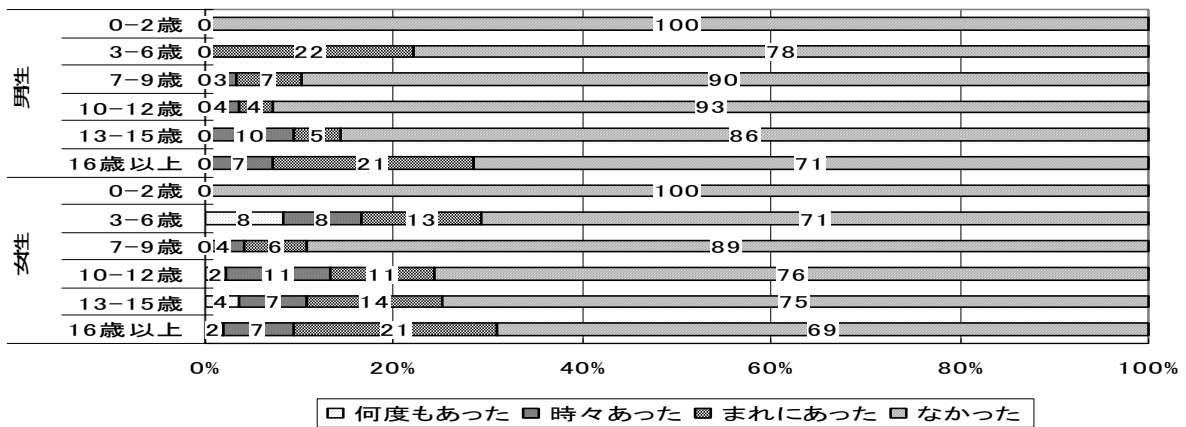


図 8-28 長子年齢別 第3子の「大きな問題やトラブル」

### 8-3 青年期以降の子どもの状態、子との関係

#### 1) 生存している子どもの就業状況

この質問項目は20歳未満に子どもが多い47歳以下の回答者には尋ねていない。まずは男性回答者48-52歳で比較すると、生存子数が1人の第1子が就業中であるのは20%、生存子数が2人の第1子35%、生存子数が3人以上の第1子45%、となっている。女性回答者についてもほぼ同様の結果が得られている。生存子数が1人の第1子が就業中であるのは40%、生存子数が2人の第1子60%、生存子数が3人以上の第1子75%である。第2子や第3子については生存子数の違いはみられない。

NFRJ98でも同じ傾向がみられた。男性回答者48-52歳で比較すると、生存子数が1人の第1子が就業中であるのは37%、生存子数が2人の第1子52%、生存子数が3人以上の第1子64%、となっている。女性回答者についてもほぼ同様の結果が得られている。生存子数が1人の第1子が就業中であるのは55%、生存子数が2人の第1子72%、生存子数が3人以上の第1子71%である。

NFRJ03とNFRJ98を比較した全体的な傾向として、回答者が中年期の子どもの就業割合は約10~20ポイント低下している。そのかわりに、就学割合と無職割合がほぼ同じ程度に上昇している。

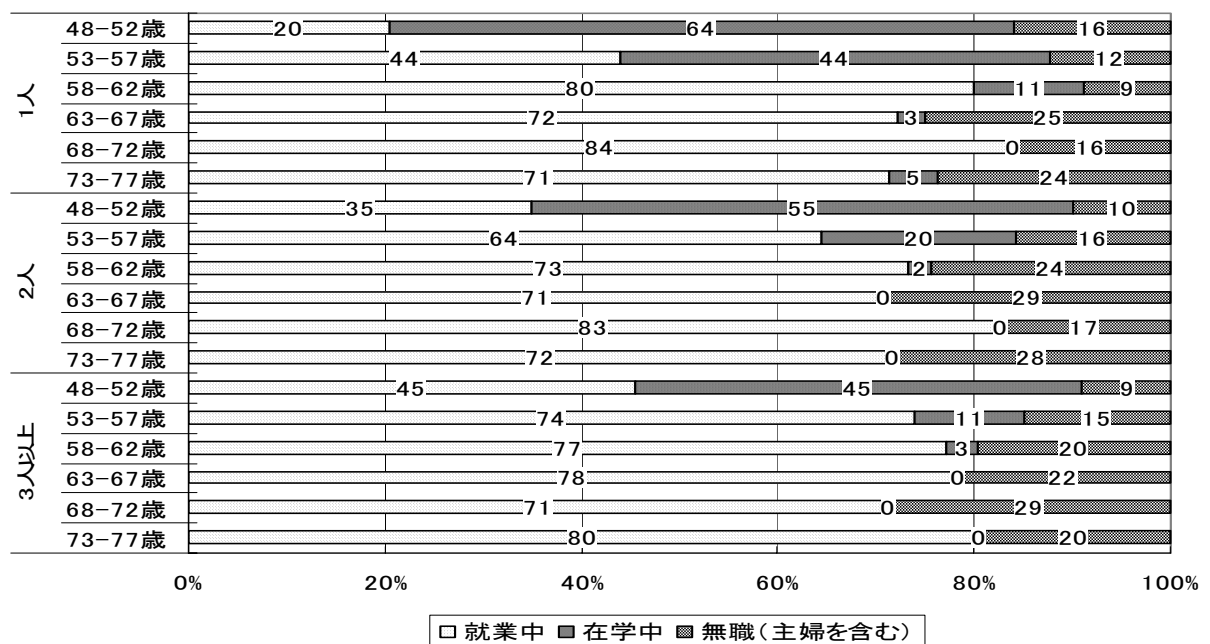


図 8-29 生存子数別 第1子の就業状況 (男性回答)

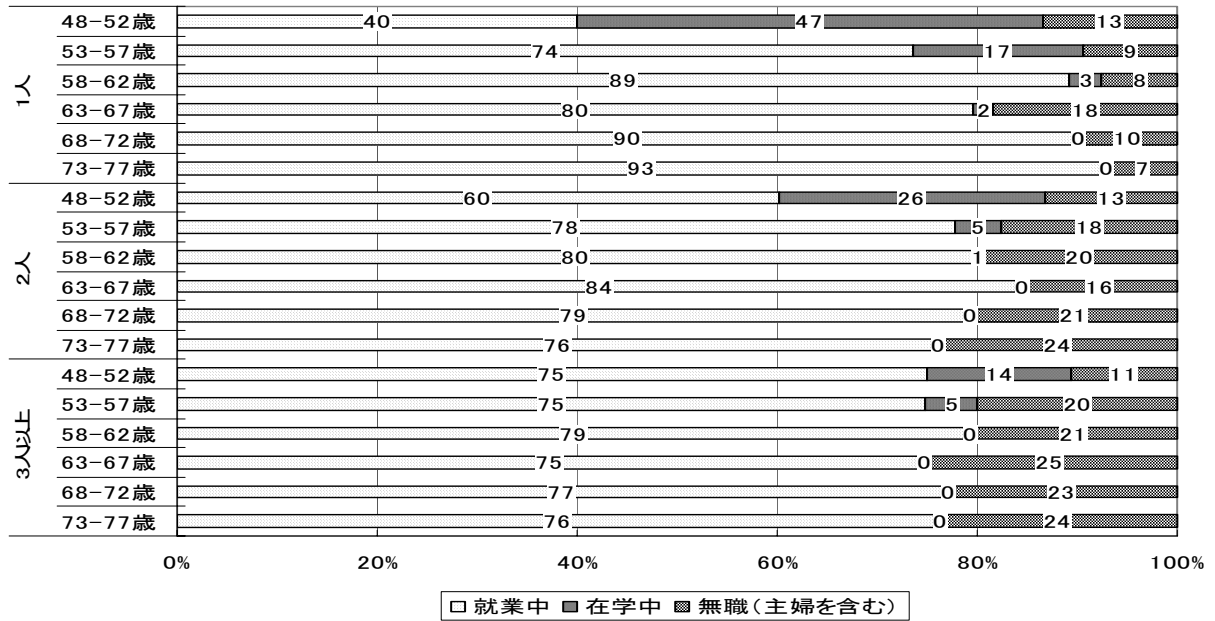


図 8-30 生存子数別 第1子の就業状況 (女性回答)

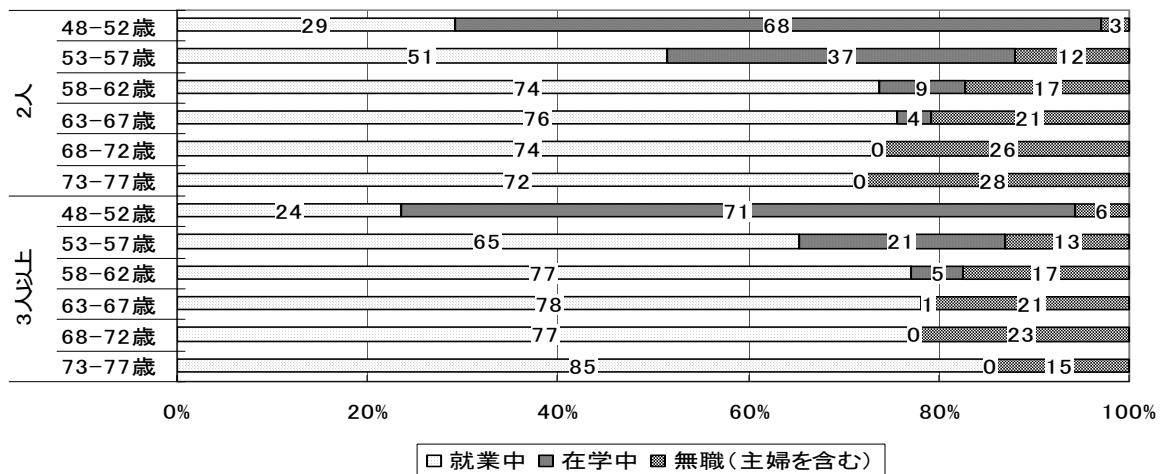


図 8-31 生存子数別 第2子の就業状況 (男性回答)

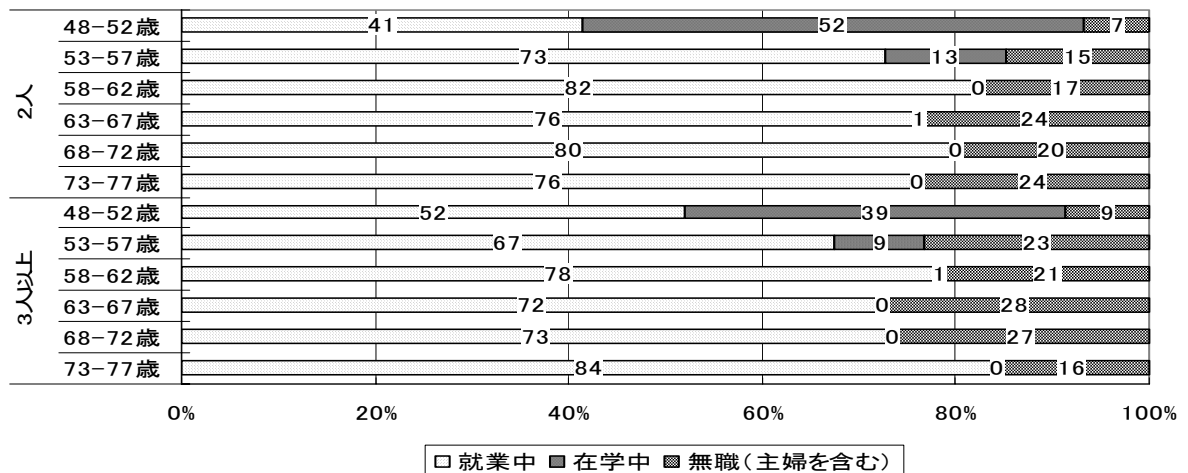


図 8-32 生存子数別 第2子の就業状況 (女性回答)

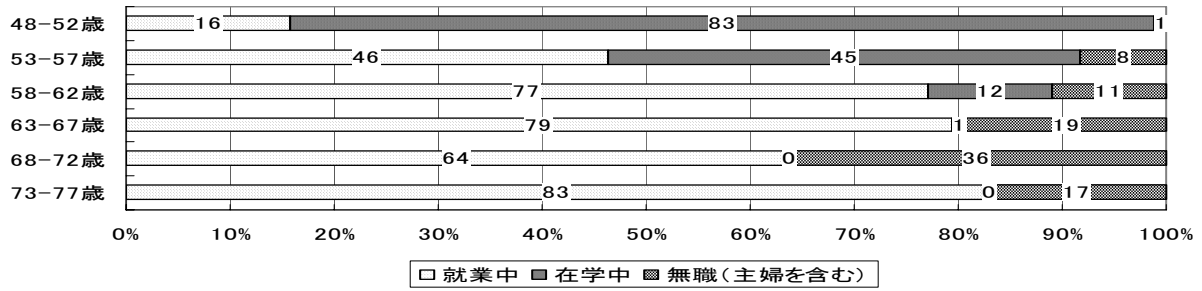


図 8-33 第 3 子の就業状況 (男性回答)

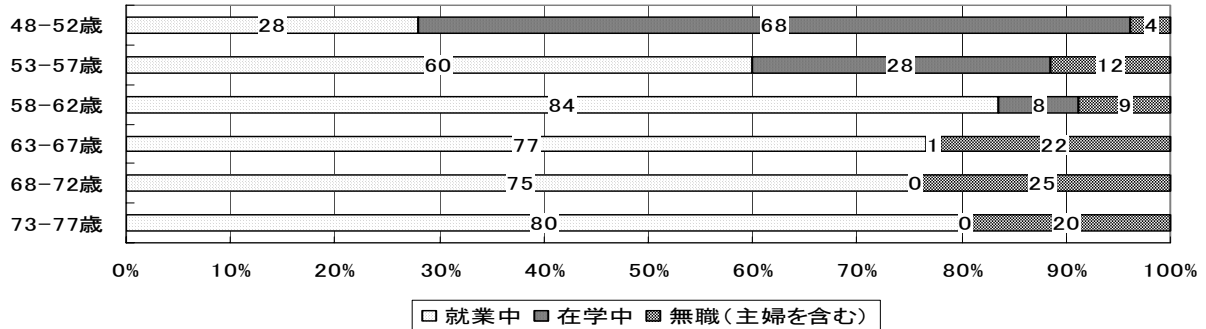


図 8-34 第 3 子の就業状況 (女性回答)

## 2) 生存している子どもの配偶状態

子ども達の半数以上が既婚となるのは、回答者が 58-62 歳、63-67 歳の頃である。そして、男性回答者が 73-77 歳のケースで子どもの未婚割合を比較すると、生存子が 1 人の第 1 子のケースで 19%、生存子 2 人の第 1 子 15%、生存子 3 人以上の第 1 子 13%、女性回答者でも同様に、生存子が 1 人の第 1 子のケースで 14%、生存子 2 人の第 1 子 9%、生存子 3 人以上の第 1 子 10%である。

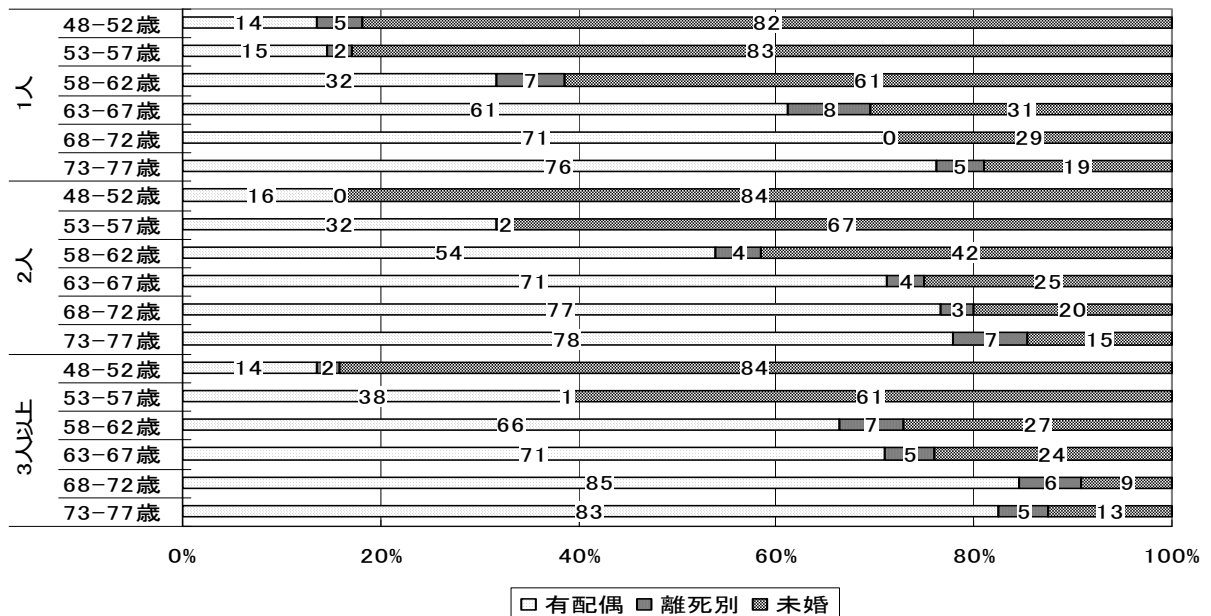


図 8-35 生存子数別 第 1 子の配偶状態 (男性回答)



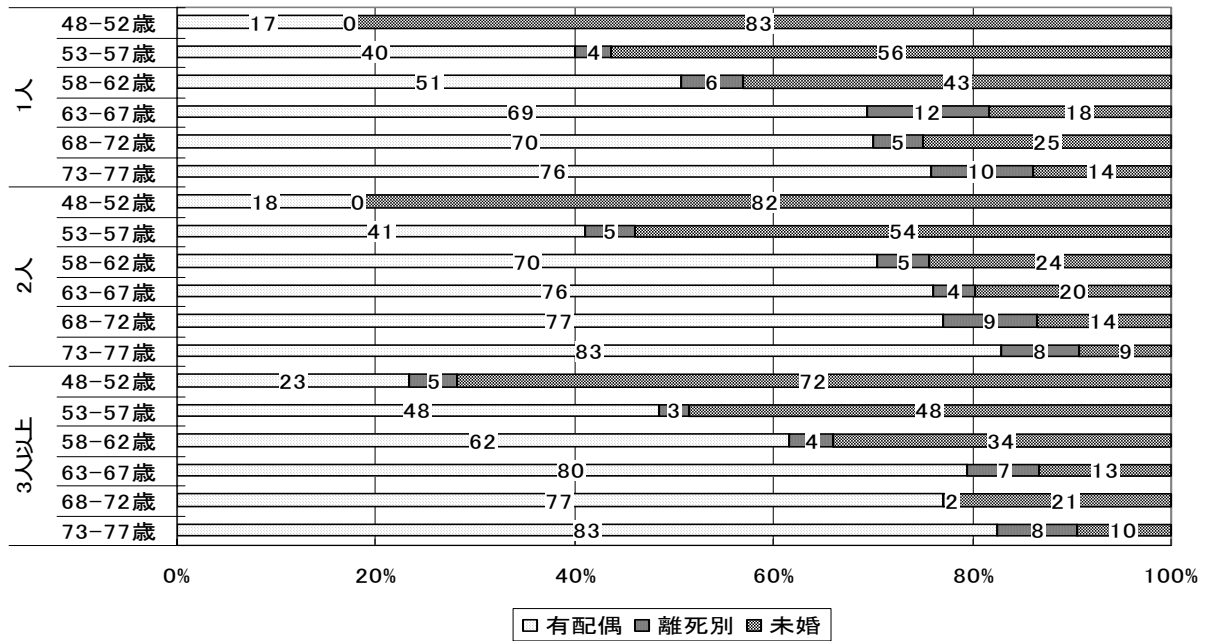


図 8-36 生存子数別 第1子の配偶状態 (女性回答)

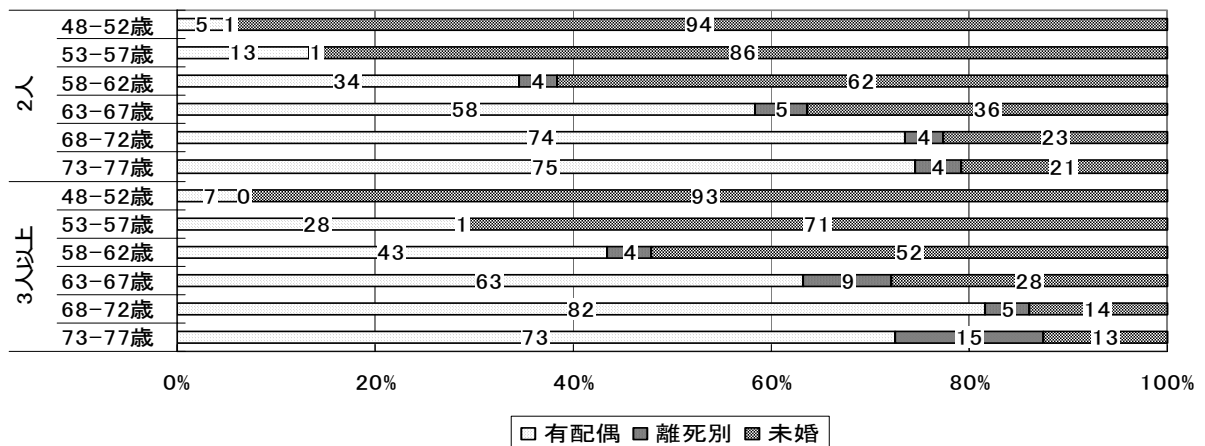


図 8-37 生存子数別 第2子の配偶状態 (男性回答)

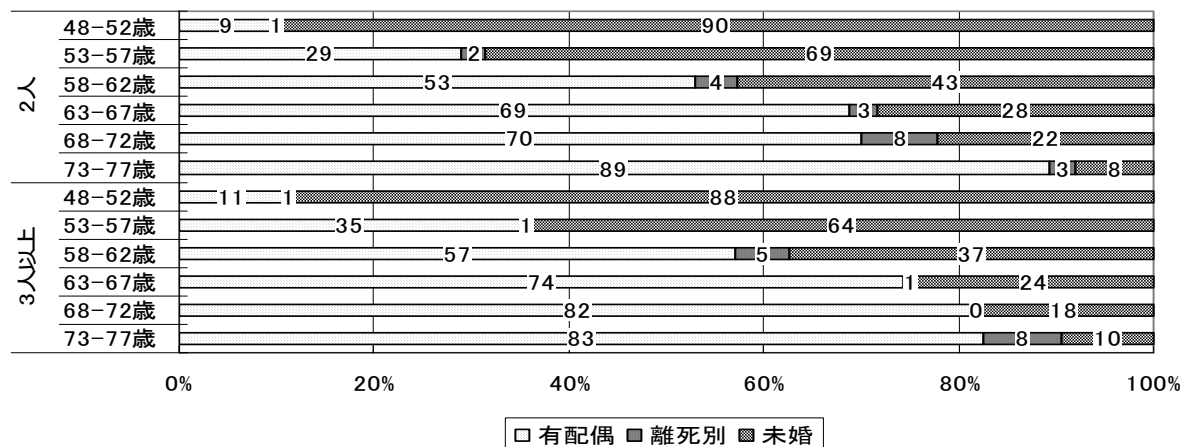


図 8-38 生存子数別 第2子の配偶状態 (女性回答)

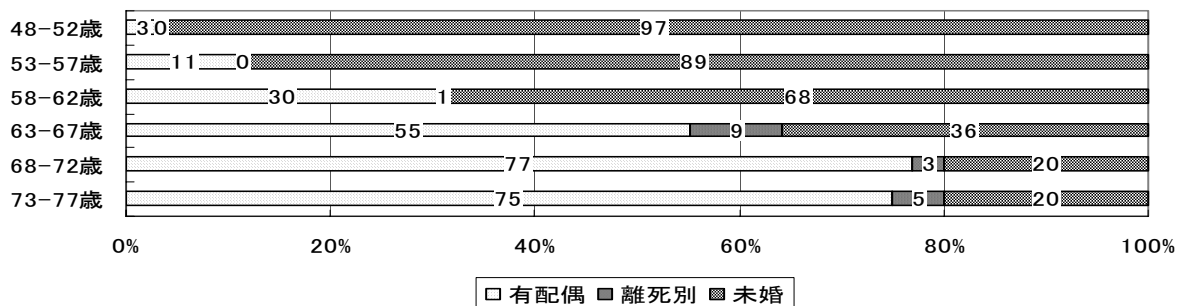


図 8-39 第 3 子の配偶状態（男性回答）

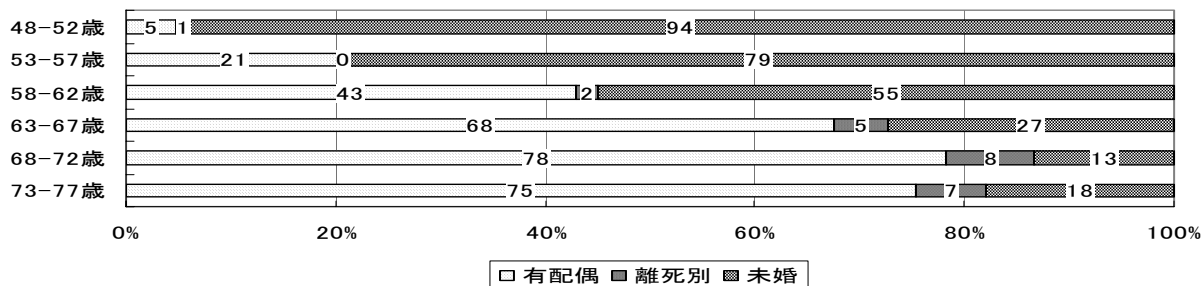


図 8-40 第 3 子の配偶状態（女性回答）

### 3) 生存している子どもの居住状態

この質問項目については、子どもが 20 歳未満であるケースが多い 47 歳以下の回答者には尋ねていない。子どもの人数別に第 1 子の居住状態をみると、20 歳以上の割合が男性回答者で 60%、女性回答者で 86%にのぼる 48-52 歳のケースでも、子どもが 1 人の場合の第 1 子は男性回答で 75%が、女性回答で 77%が回答者と同じ家屋に住んでいる。回答者が同じ年齢層であっても、生存子数の多い第 1 子は、子どもが 1 人のケースよりも同居している割合が低い。

回答者が高齢になるにつれて、再び、子どもが同居している割合が上昇する可能性が考えられるのだが、男性、女性ともに回答者が 73-77 歳のケースで、そのような傾向が見られるのも、やはり生存子数が 1 人のケースの第 1 子である。

男性女性ともに回答者が中年期にあるケースの子どもとの同居割合に関して、NFRJ98 でもほぼ同様に、生存子数の多い第 1 子は、子どもが 1 人のケースよりも同居している割合が低い傾向がある。しかし、回答者が加齢するにつれて、同居割合が高くなる傾向は NFRJ98 ではみられなかった。

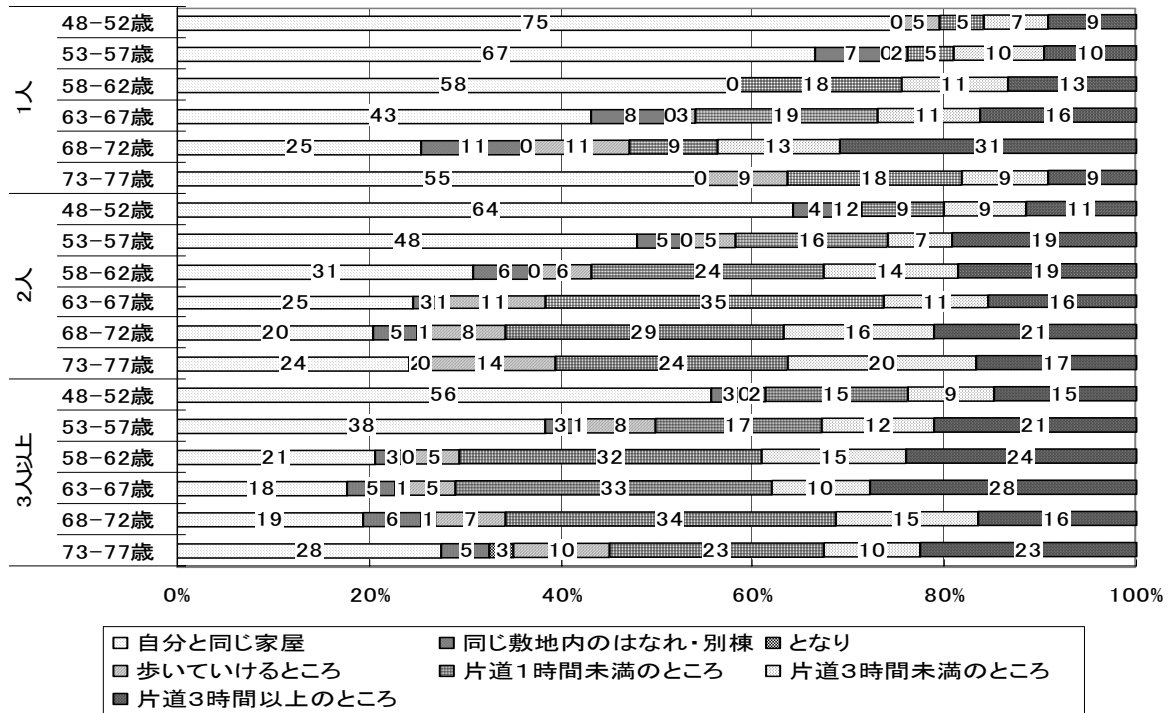


図 8-41 生存子人数別 第1子の居住状況 (男性回答)

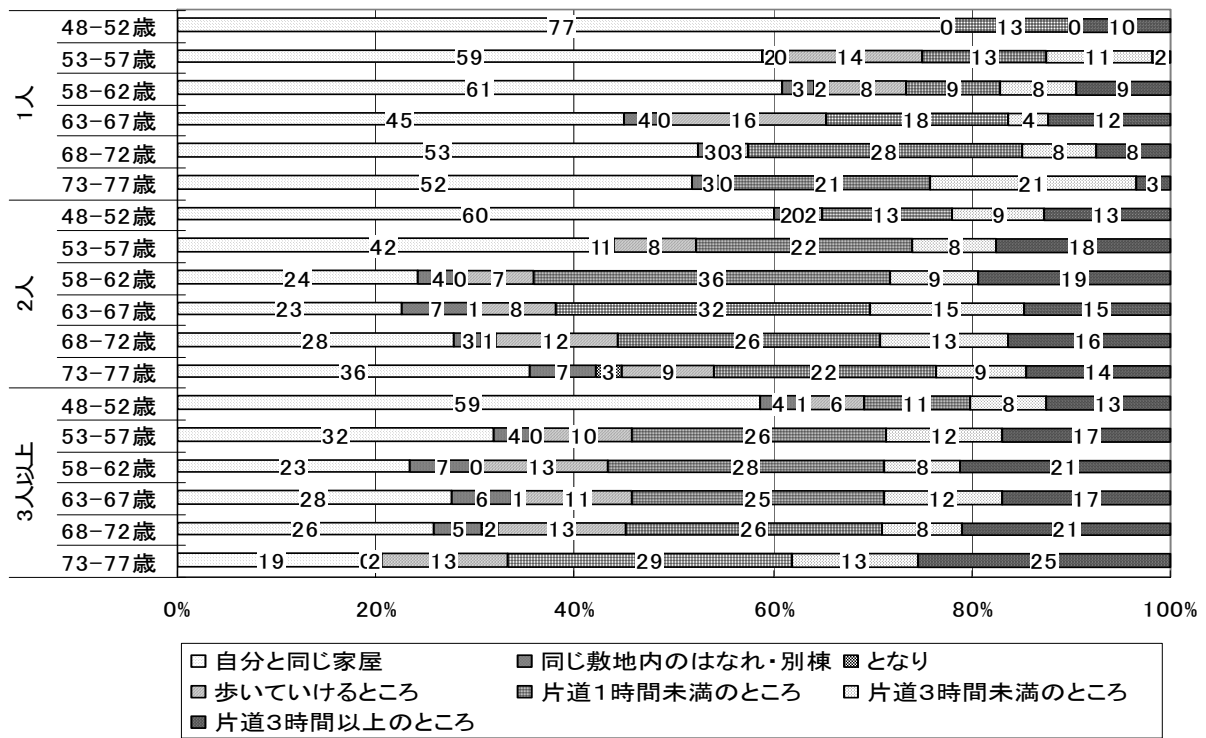


図 8-42 生存子人数別 第1子の居住状況 (女性回答)

第1子と同様に、男性女性とも回答者が48-52歳のケースでは、第2子の多くが回答者と同じ家屋に住んでいる。回答者が73-77歳のケースにおいて、生存子数が2人でも3人

以上でも、第2子の同居割合に違いはなく値も高くはない。生存子数が1人の場合に、その子どもの同居割合が高くなり、生存子数が増えることで子どもが回答者と同居している割合が低下していることから、回答者は必ずしも他の子どもよりも長子と同居する傾向にあるとはいえないだろう。そして、今後確認の作業が必要にはなるが、第1子、第2子、第3子それぞれの男女比はさほど大きくないことから、他の子どもよりも長男と同居する割合もさほど高くはないといえるかもしれない。

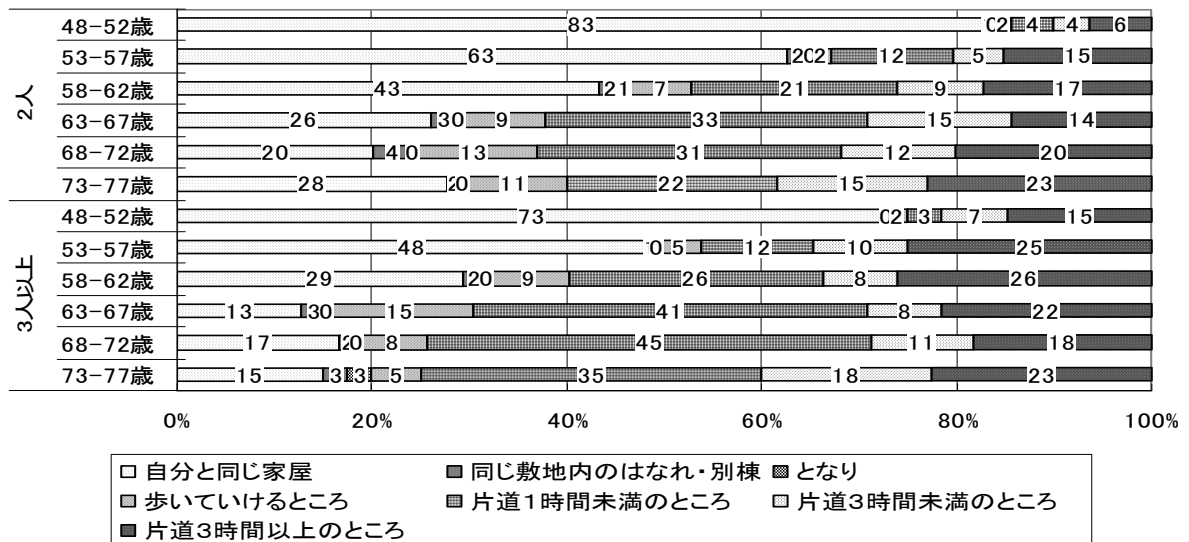


図 8-43 生存子人数別 第2子の居住状況（男性回答）

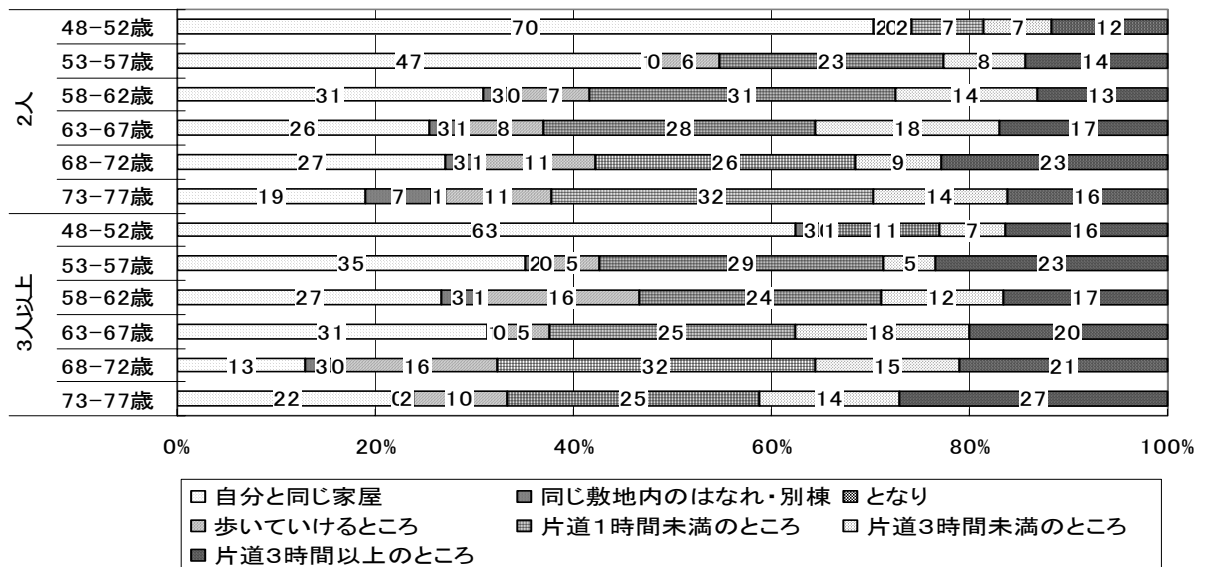


図 8-44 生存子人数別 第2子の居住状況（女性回答）

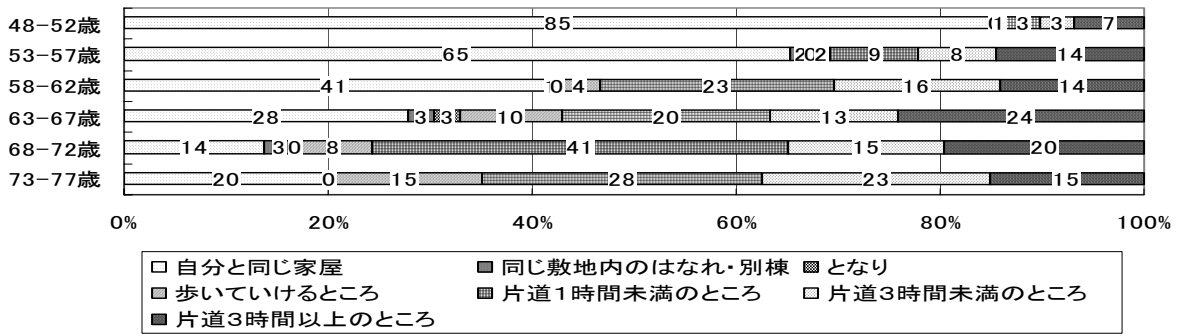


図 8-45 第3子の居住状況 (男性回答)

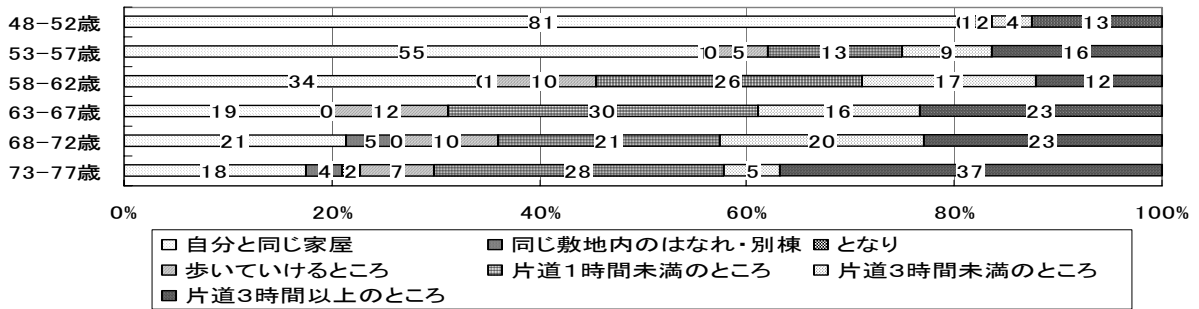


図 8-46 第3子の居住状況 (女性回答)

4) 「話らしい話」の頻度

子と「話らしい話」をする頻度は、女性回答者の方が男性回答者よりも高い。たとえば、生存子1人で回答者が48-52歳のケースでは、子どもと「ほぼ毎日」話す男性は41%、一方女性は65%である。このような傾向はほぼ、一貫している。

次に、生存子数別に比較する。生存子数1人の第1子と生存子数2人や3人以上の第1子では、生存子数1人の第1子の方が話す頻度が高い。同じ生存子数のケースでは、第1子と第2子では、第1子の方が話す頻度は高いとはいえない。

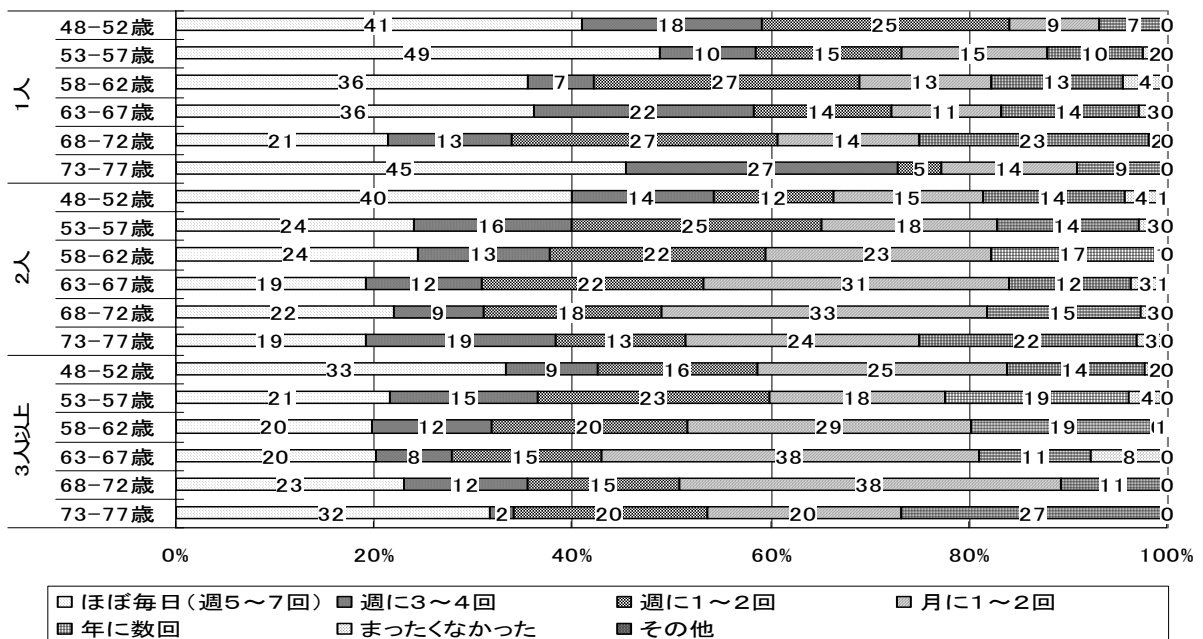


図 8-47 生存子数別 第1子との「話らしい話」の頻度 (男性回答)

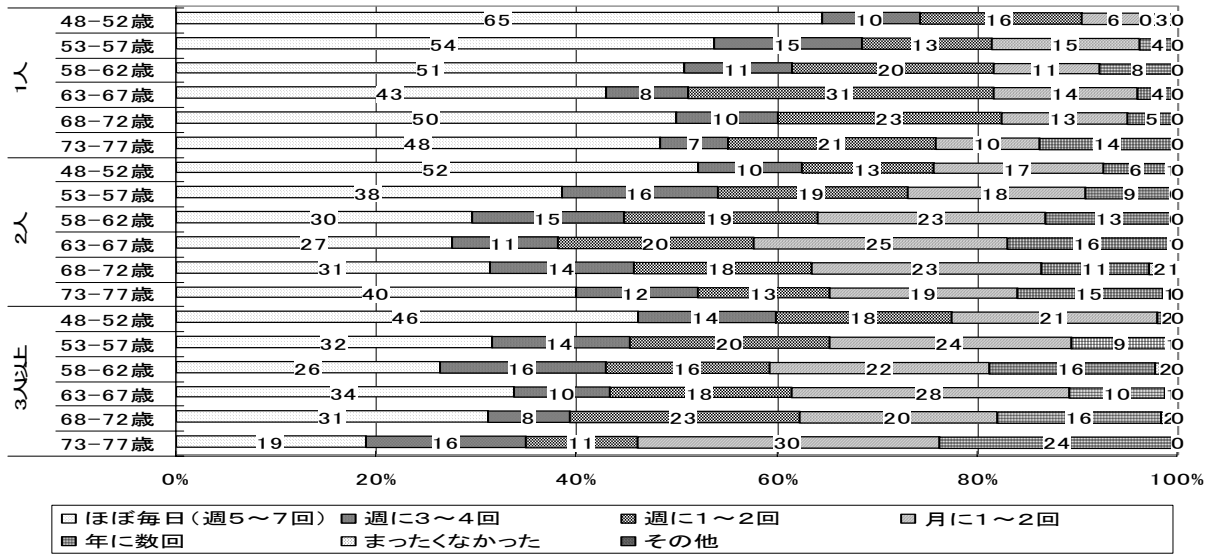


図 8-48 生存子数別 第1子との「話らしい話」の頻度（女性回答）

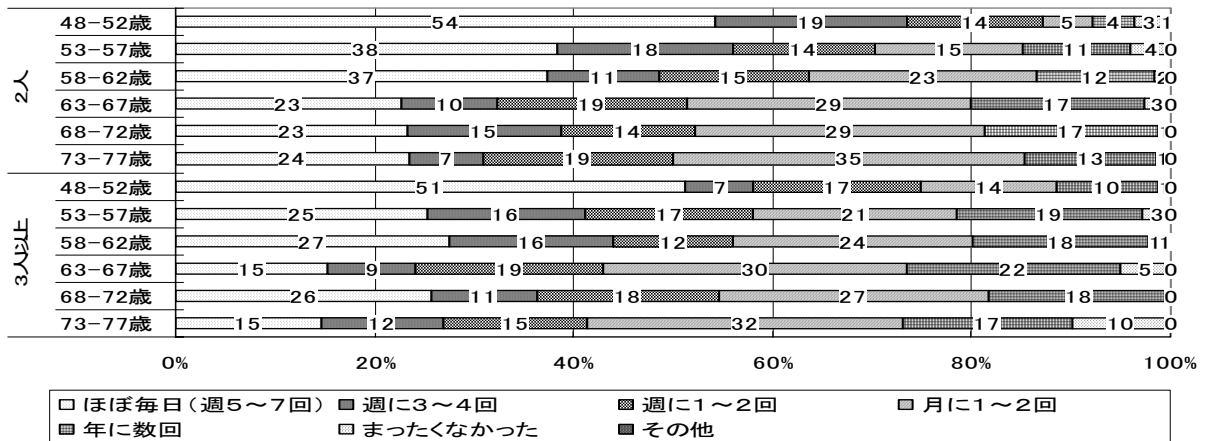


図 8-49 生存子数別 第2子との「話らしい話」の頻度（男性回答）

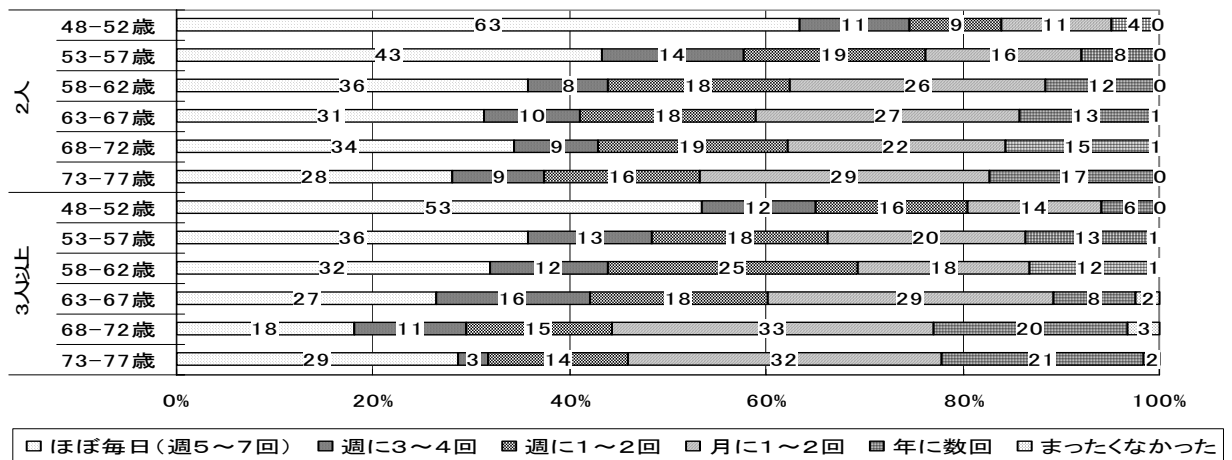


図 8-50 生存子数別 第2子との「話らしい話」の頻度（女性回答）

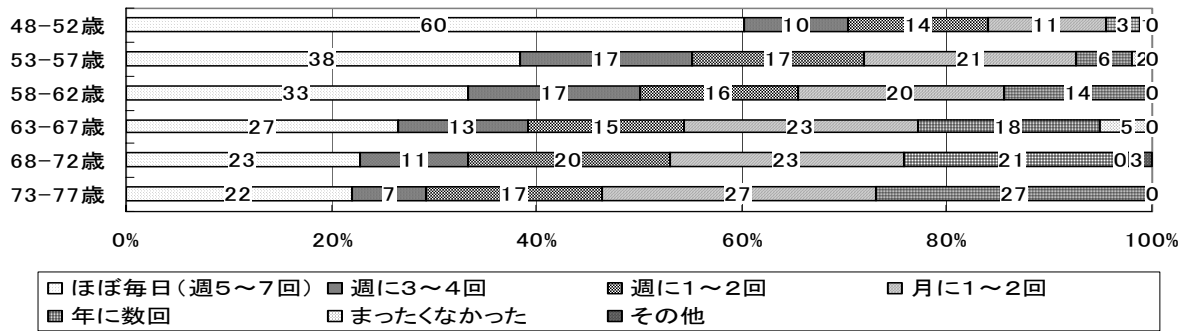


図 8-51 第3子との「話らしい話」の頻度 (男性回答)

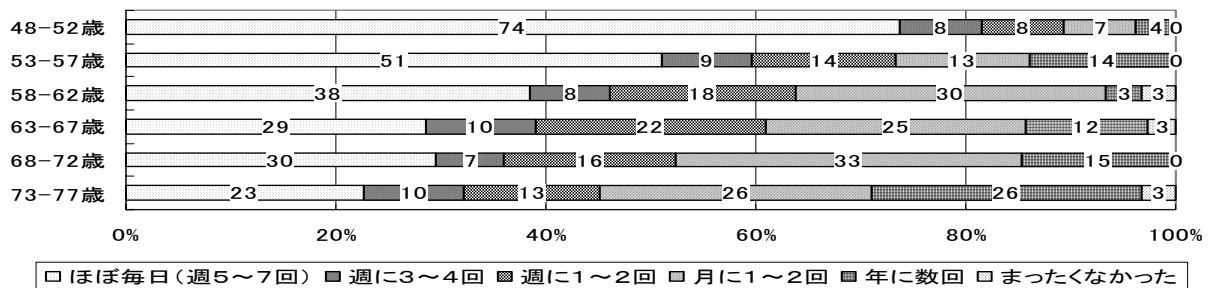


図 8-52 第3子との「話らしい話」の頻度 (女性回答)

5) 金銭的な援助の授受

全体的な傾向としては、男性回答者の場合は63歳以上の年齢階層で、金銭的な援助を受ける割合が1割を超える。しかし、女性回答者はほぼ全ての年齢階層で1割以上が援助を受けている。

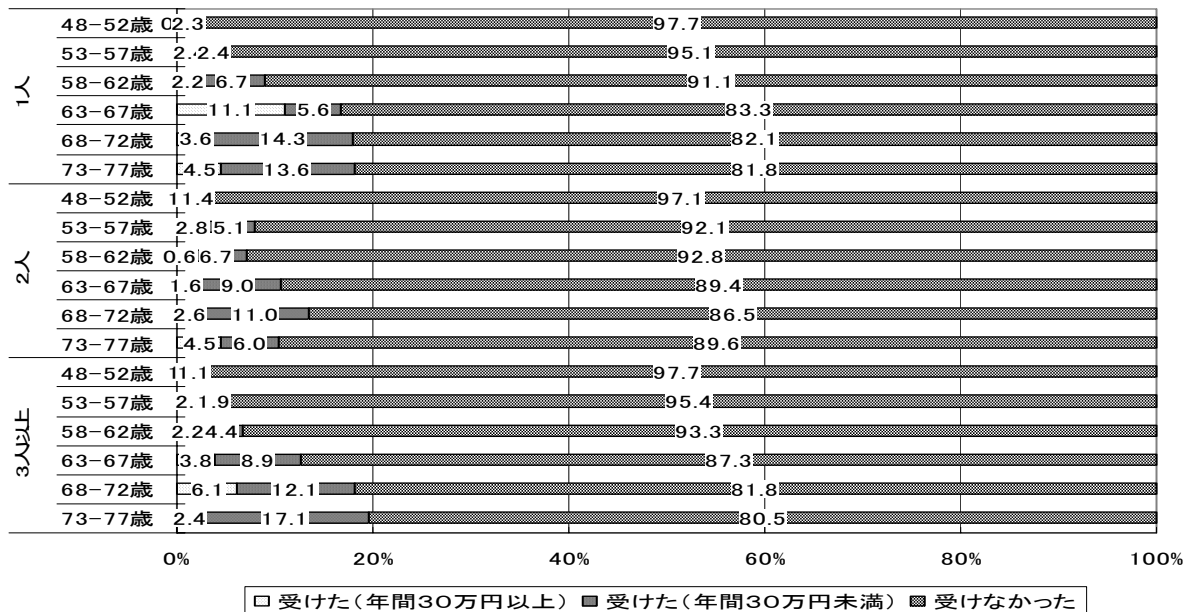


図 8-53 生存子数別 第1子からの金銭的援助 (男性回答)

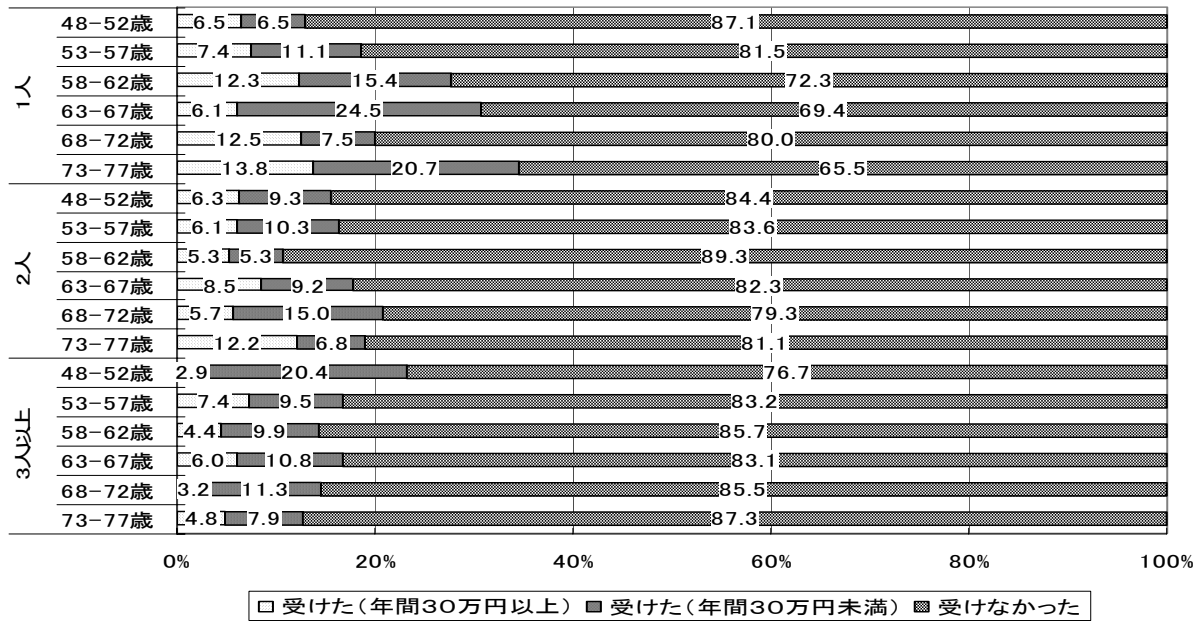


図 8-54 生存子数別 第1子からの金銭的援助 (女性回答)

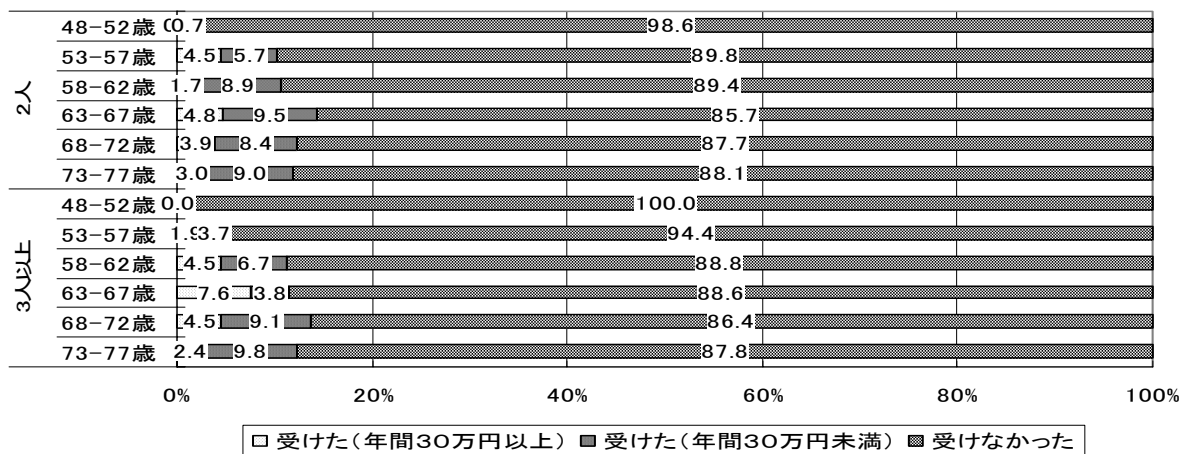


図 8-55 生存子数別 第2子からの金銭的援助 (男性回答)

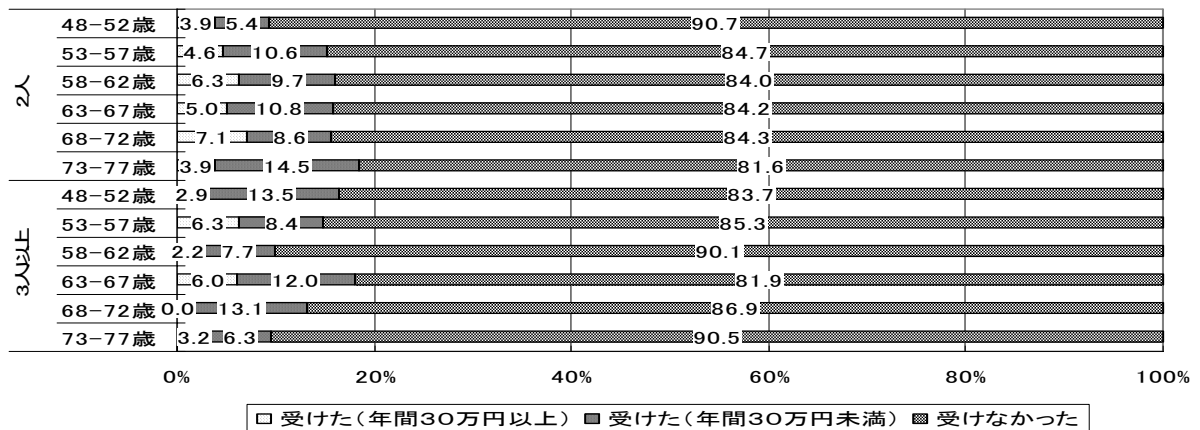


図 8-56 生存子数別 第2子からの金銭的援助 (女性回答)



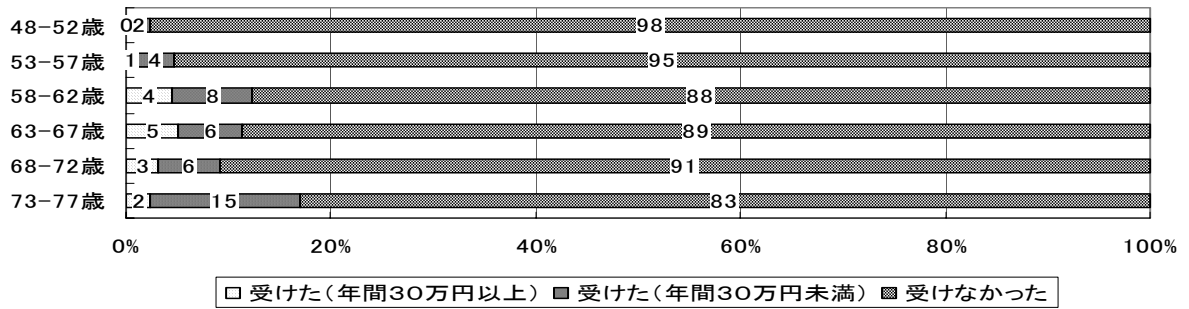


図 8-57 第3子からの金銭的援助（男性回答）

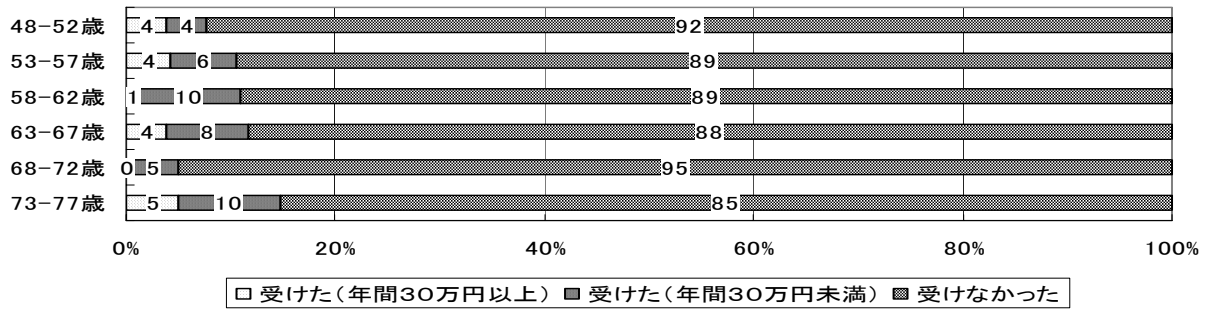


図 8-58 第3子からの金銭的援助（女性回答）

次に、子どもへの金銭的援助をみてみよう。回答者の年齢が低いほど子どもの年齢も低いので、子どもへの金銭的な援助をしている割合は高くなる。ただし、男性回答者と女性回答者で援助をしている割合に大きな違いはない。

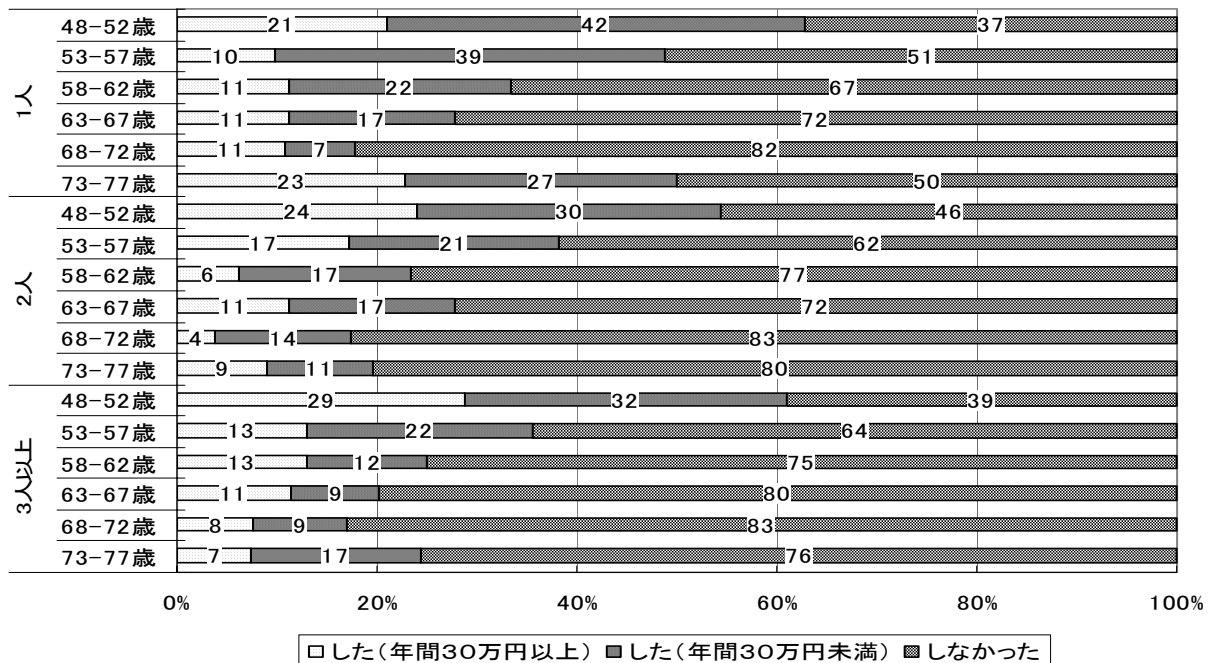


図 8-59 生存子数別 第1子への金銭的援助（男性回答）

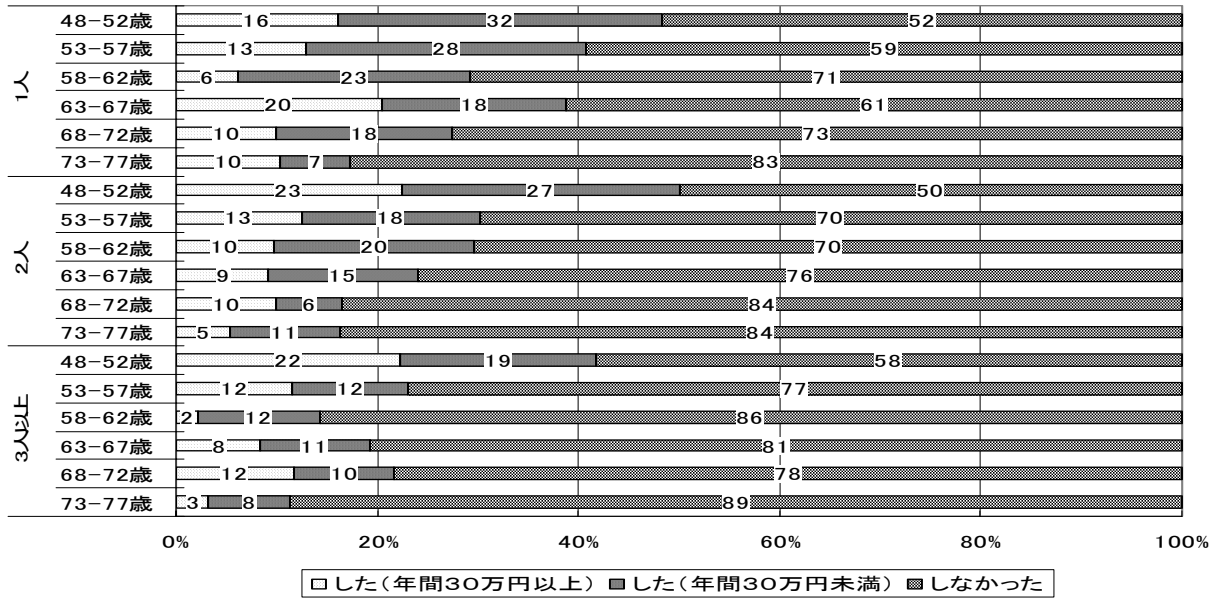


図 8-60 生存子数別 第1子への金銭的援助（女性回答）

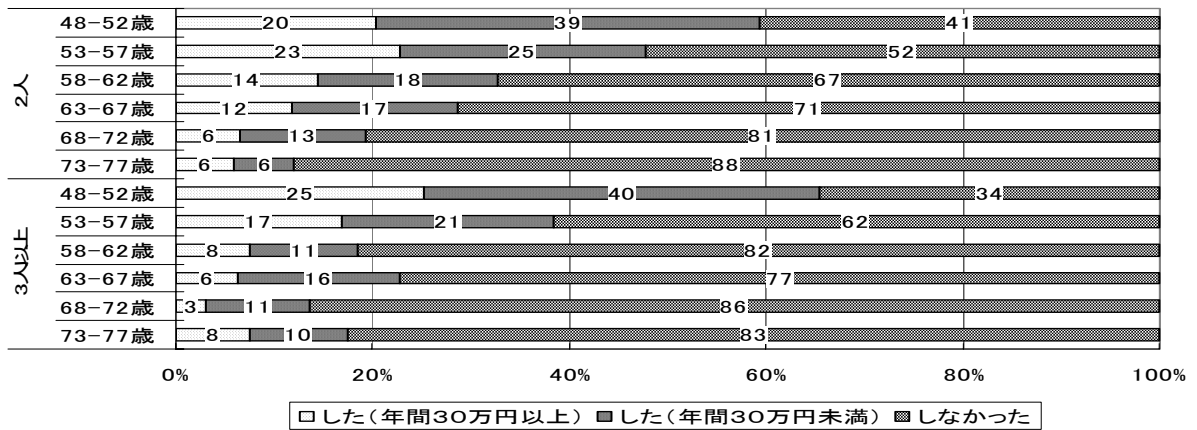


図 8-61 生存子数別 第2子への金銭的援助（男性回答）

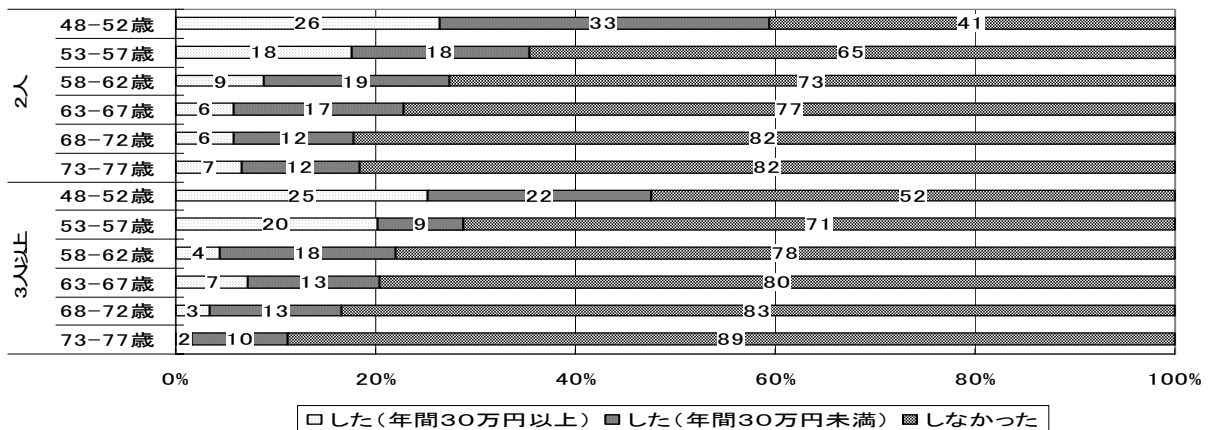


図 8-62 生存子数別 第2子への金銭的援助（女性回答）

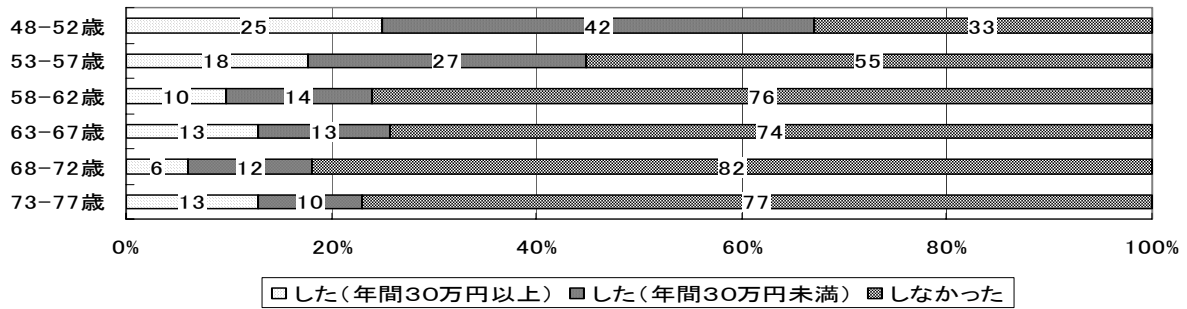


図 8-63 第3子への金銭的援助（男性回答）

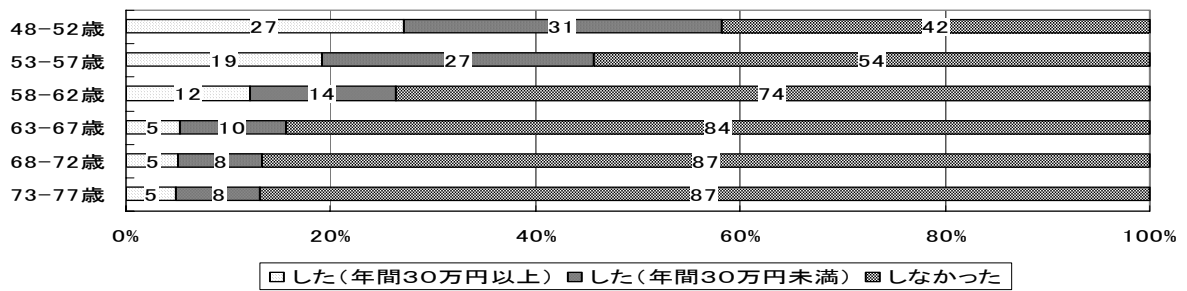


図 8-64 第3子への金銭的援助（女性回答）

6) 金銭以外の援助の授受

金銭的な援助を子どもから受けていたのは女性の方が多かったが、金銭以外の子どもからの援助を受けるのも女性の方が多い。そして、回答者の加齢とともに援助を受ける割合は高くなっている。

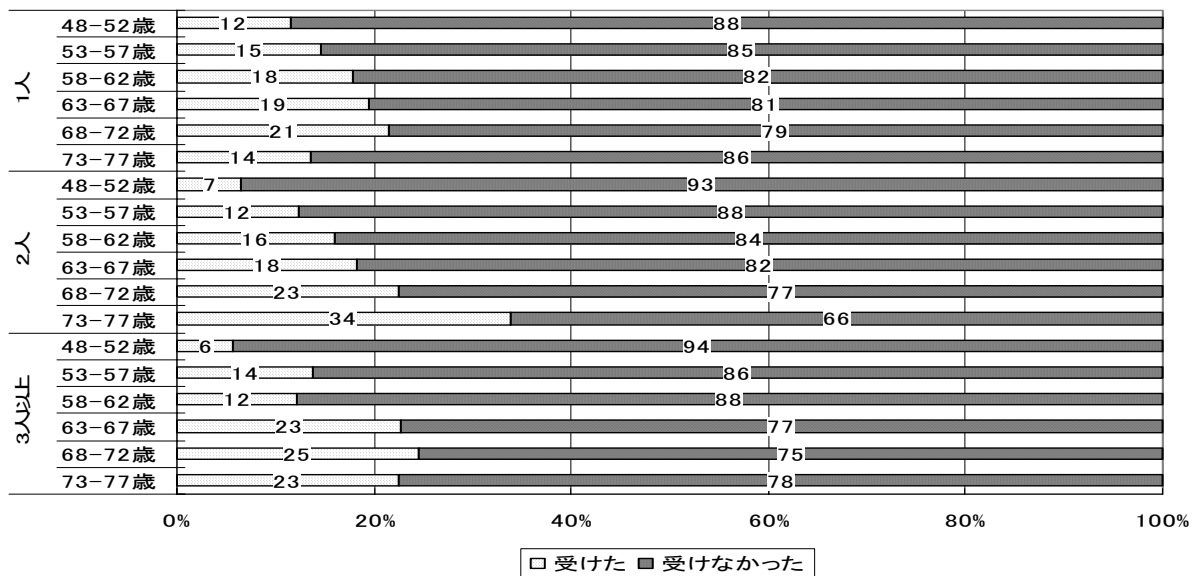


図 8-65 生存子数別 第1子からの金銭以外の援助（男性回答）

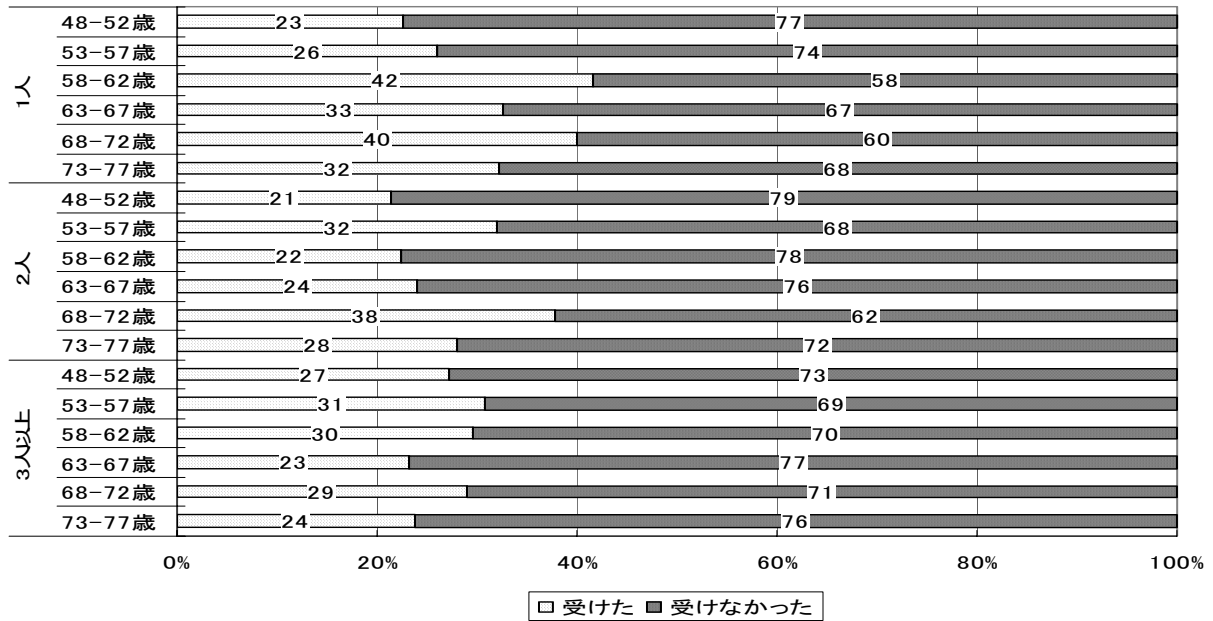


図 8-66 生存子数別 第1子からの金銭以外の援助（女性回答）

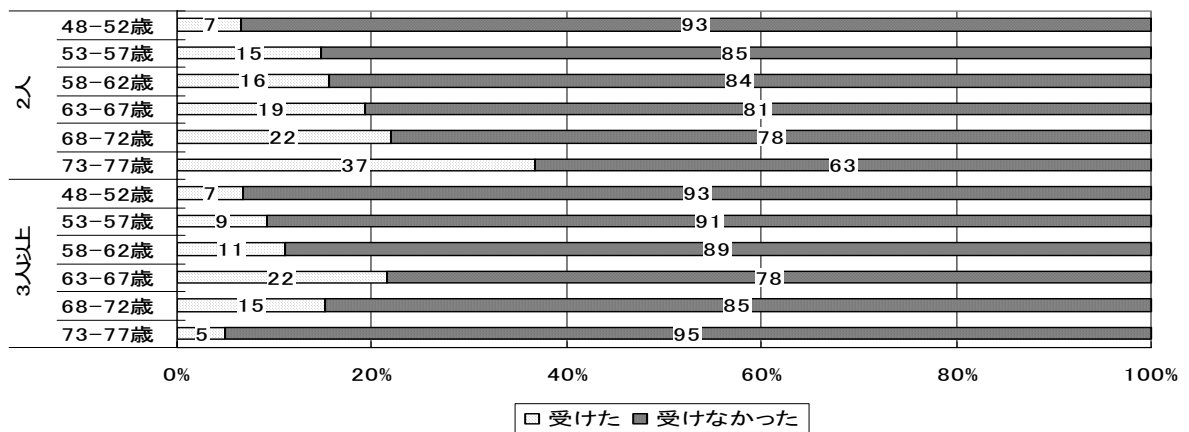


図 8-67 生存子数別 第2子からの金銭以外の援助（男性回答）

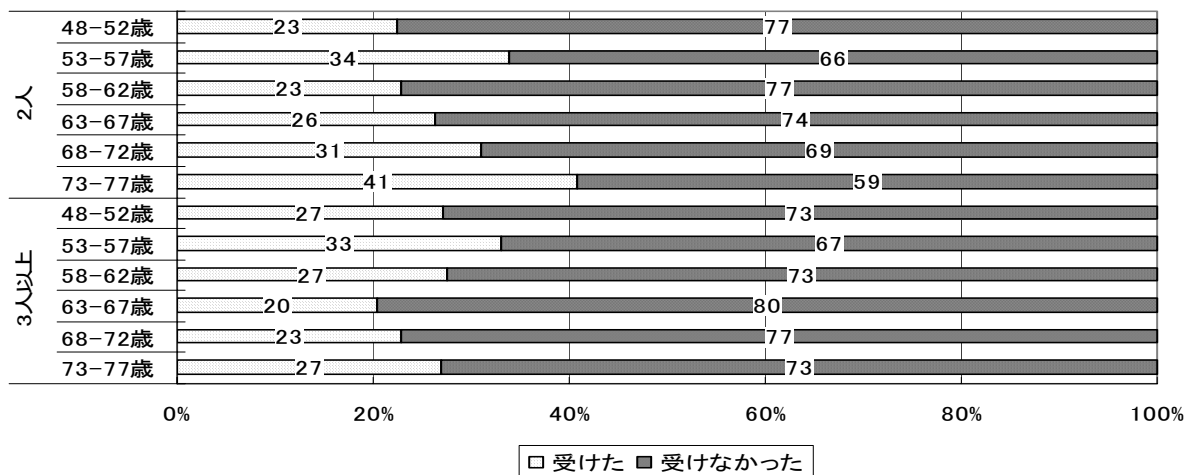


図 8-68 生存子数別 第2子からの金銭以外の援助（女性回答）

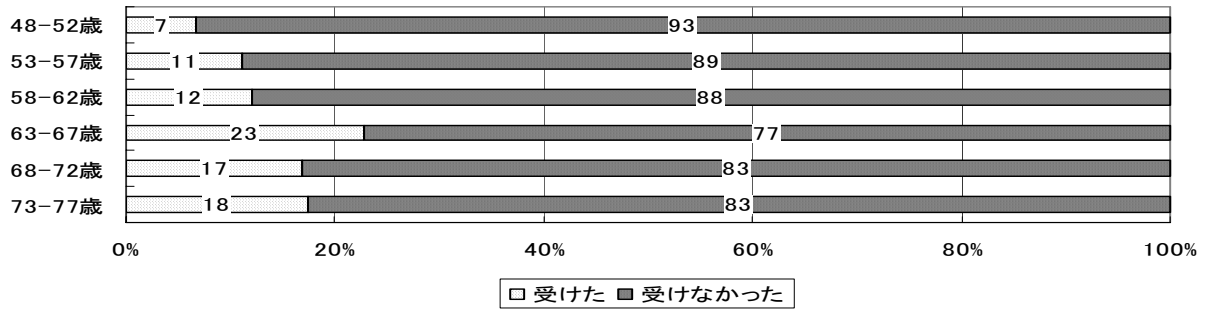


図 8-69 第3子からの金銭以外の援助（男性回答）

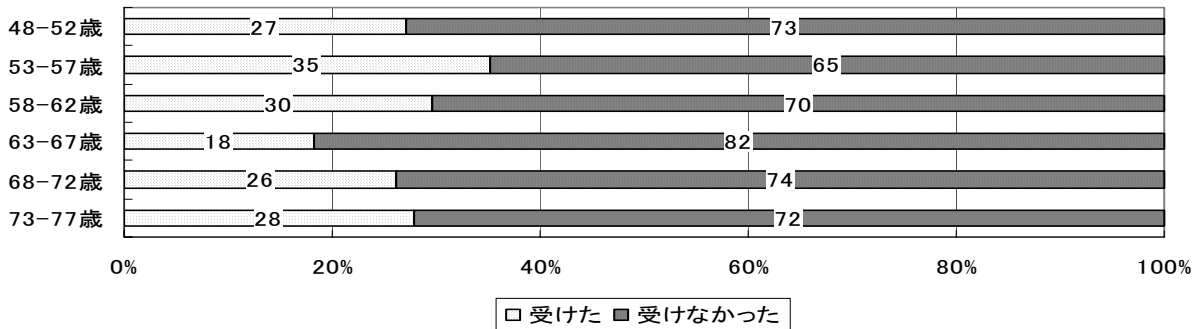


図 8-70 第3子からの金銭以外の援助（女性回答）

次に、子どもへの金銭以外の援助をみてみると、回答者が若いほど、援助している割合は高い。回答者の加齢とともに、その割合は低下する。さらに、高齢である回答者についてみてみると、生存子数が1人の第1子より生存子数が2人の第1子の方が、そして生存子数が2人の第1子より3人以上の第1子の方が、援助をしている割合は低い。そして、生存子数が2人の第2子の方が、生存子数が3人以上の第2子よりも援助をしている割合は高い。

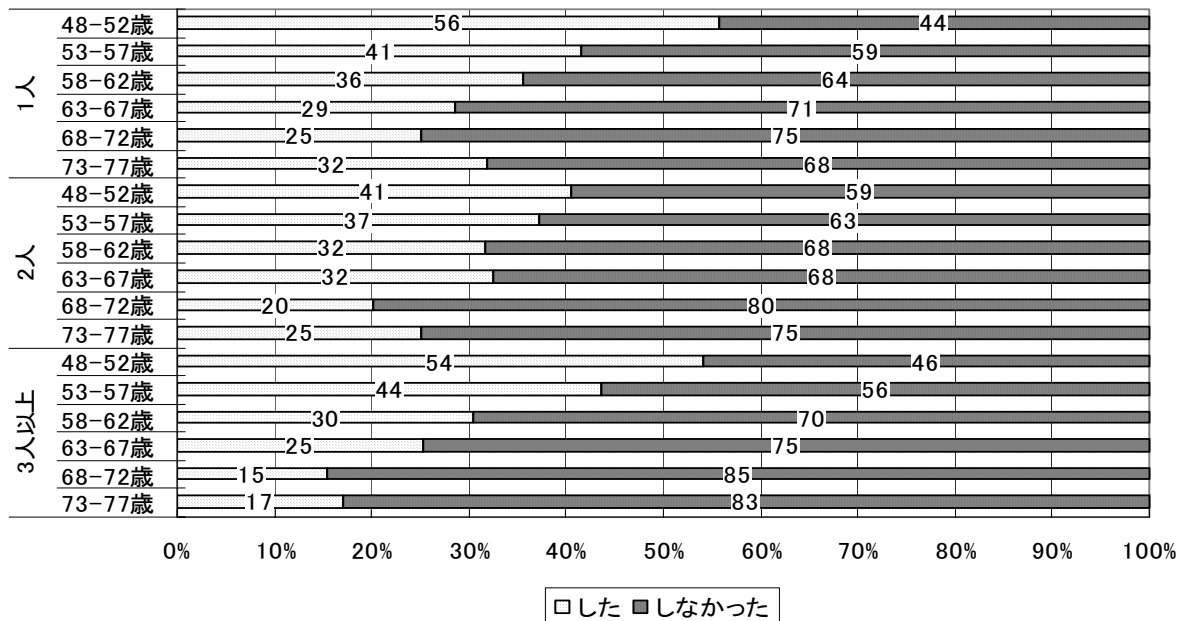


図 8-71 生存子数別 第1子への金銭以外の援助（男性回答）

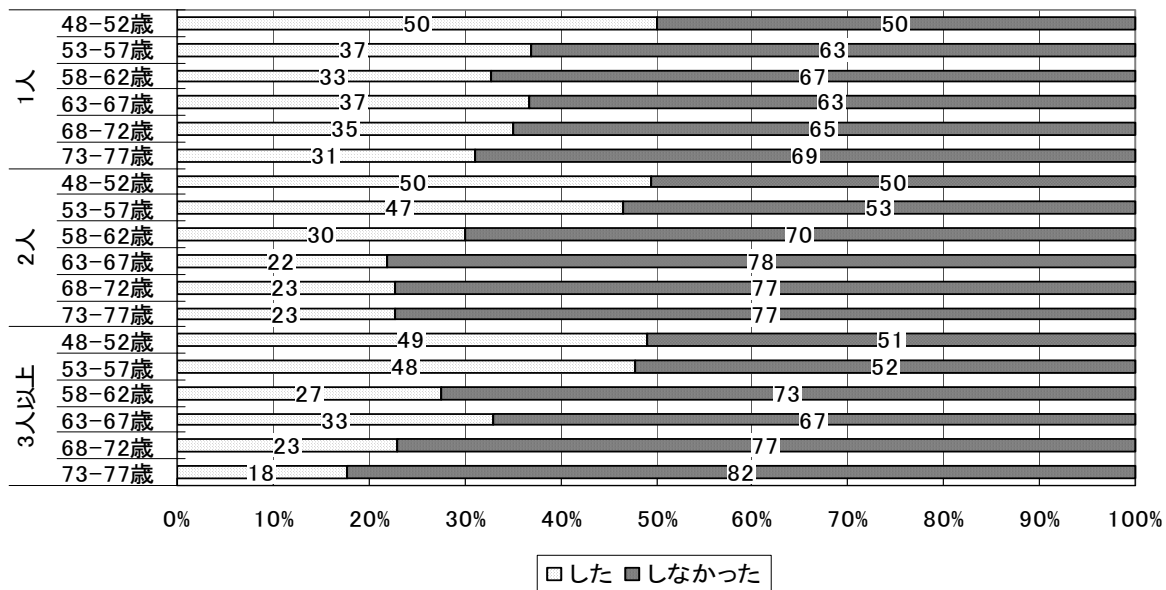


図 8-72 生存子数別 第1子への金銭以外の援助（女性回答）

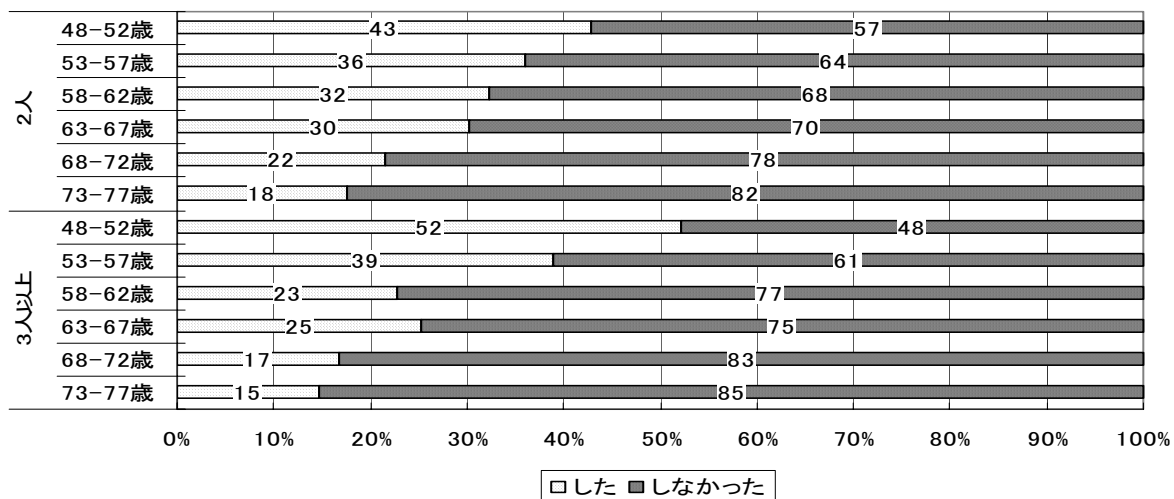


図 8-73 生存子数別 第2子への金銭以外の援助（男性回答）

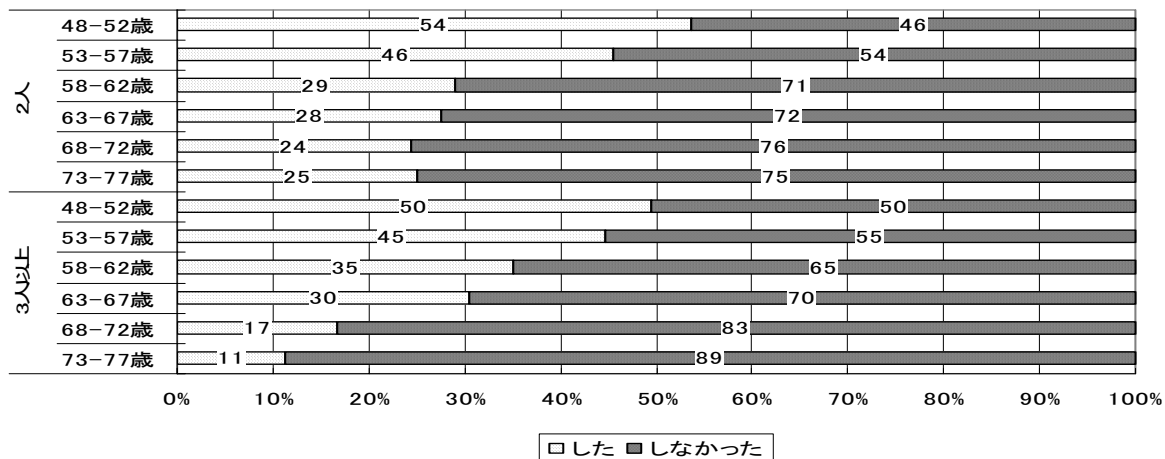


図 8-74 生存子数別 第2子への金銭以外の援助（女性回答）

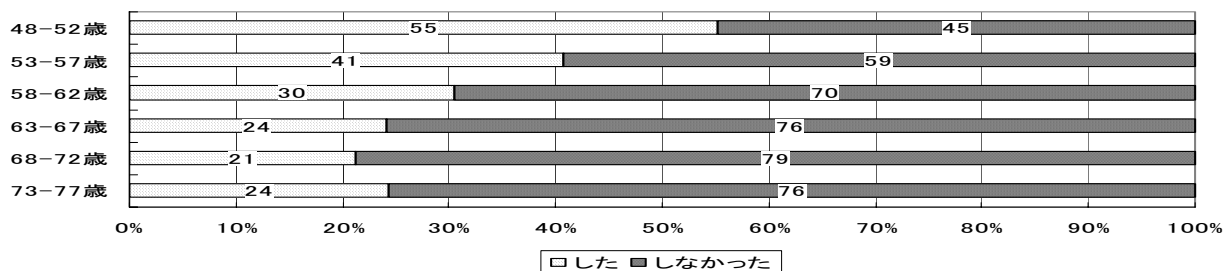


図 8-75 第3子への金銭以外の援助（男性回答）

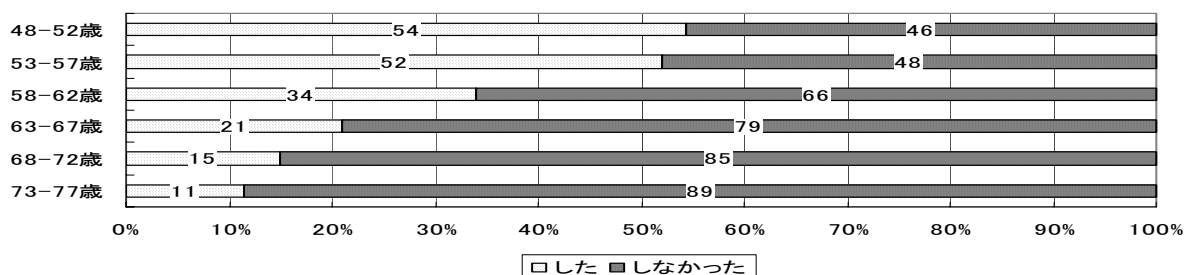


図 8-76 第3子への金銭以外の援助（女性回答）

7) 子どもとのトラブルやもめ事の頻度

子どもとのトラブルやもめ事の頻度は、全体的には「なかった」としている回答者が多くを占める。子どもと同居している割合の高い回答者の年齢が低いケースでは、トラブルやもめ事があったケースが相対的に多いが、これは接触する頻度が高いためであろう。同居している割合の高い生存子数1人のケースは、トラブルやもめ事があったケースが相対的に多いが、これも同居割合が高いためではないかと考えられる。また、同居と関連してはいるだろうが、これまでにみてきたように、会話の頻度やサポートの授受についての経験率が高いことも含めて、生存子数1人の第1子との相互作用量が多いことと関連していると思われる。

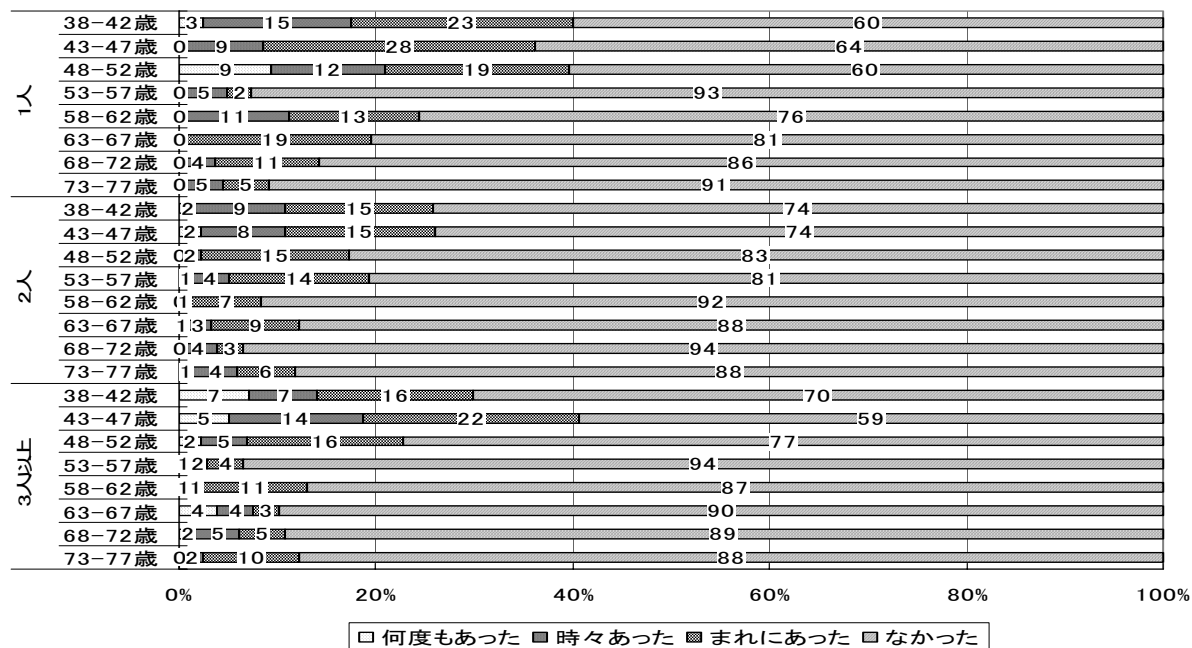


図 8-77 生存子数別 第1子とのトラブルやもめごとの頻度（男性回答）

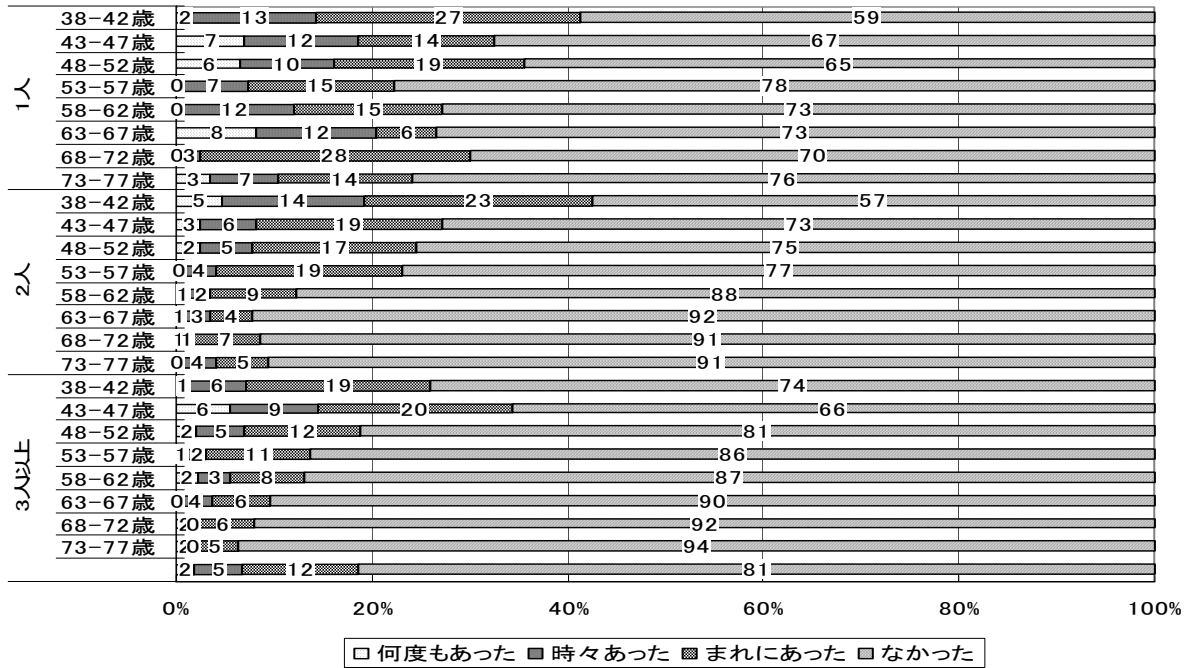


図 8-78 生存子数別 第1子とのトラブルやもめごとの頻度（女性回答）

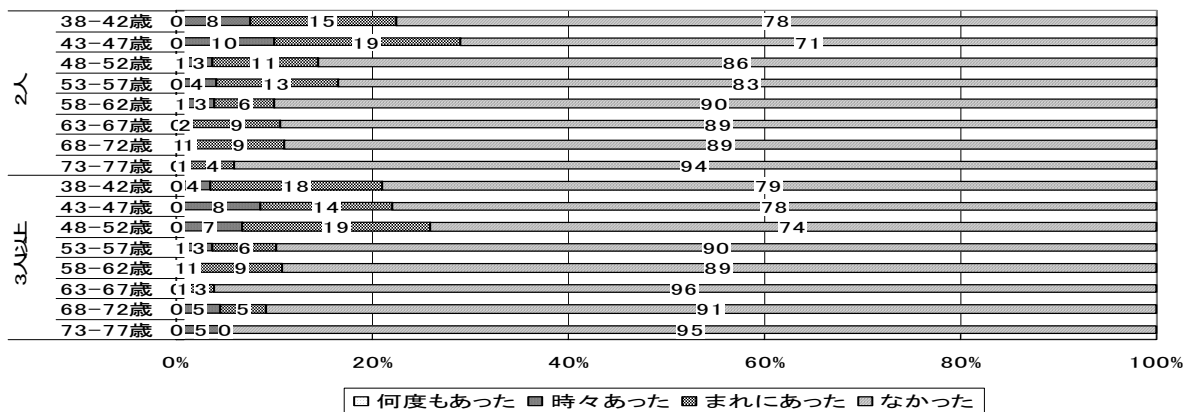


図 8-79 生存子数別 第2子とのトラブルやもめごとの頻度（男性回答）

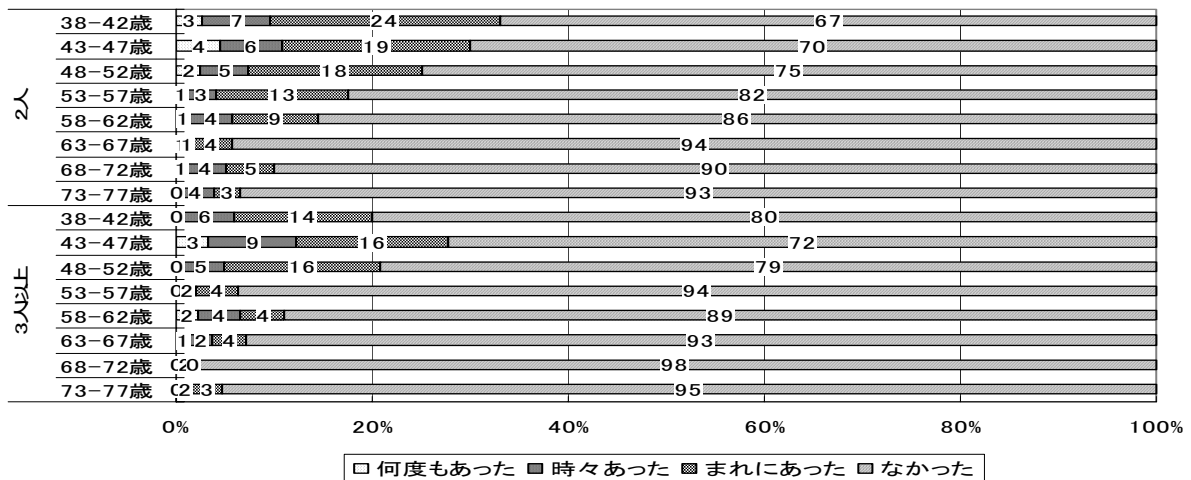


図 8-80 生存子数別 第2子とのトラブルやもめごとの頻度（女性回答）



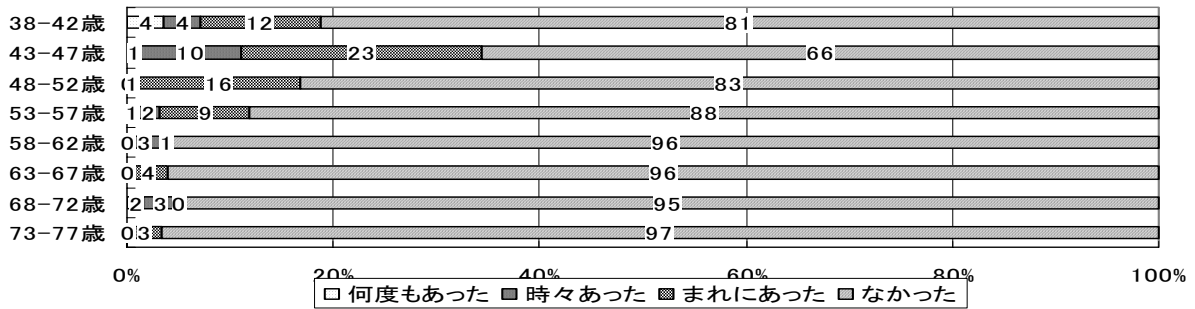


図 8-81 第3子とのトラブルやもめごとの頻度（男性回答）

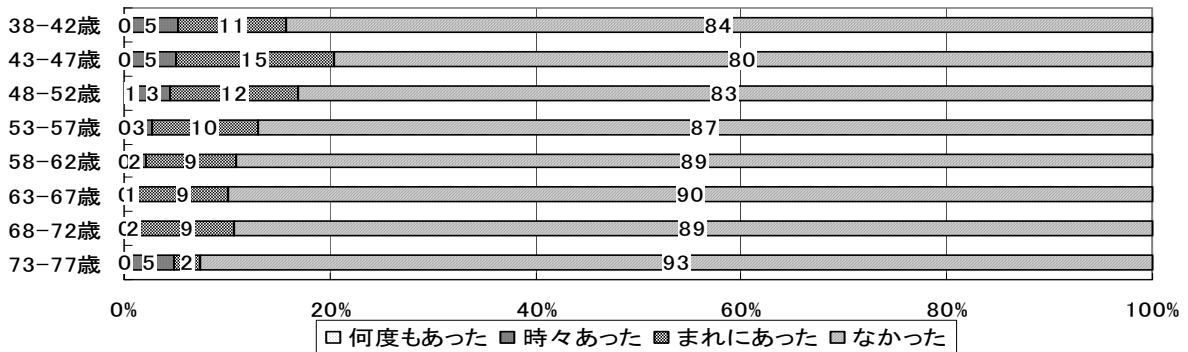


図 8-82 第3子とのトラブルやもめごとの頻度（女性回答）

#### 8-4 子との関係評価

概して若い回答者の方が子どもとの関係を良好であると評価する傾向がある。回答者が50歳代から60歳代にかけてその評価は低下し、60歳代から70歳代にかけて評価はやや回復するようだ。男性回答者が38-42歳の時、生存子数1人では90%が良好と答え、生存子数2人の第1子では83%が、生存子数3人以上の第1子では75%が良好と答えている。女性回答者もほぼ同様の傾向の回答をしている。

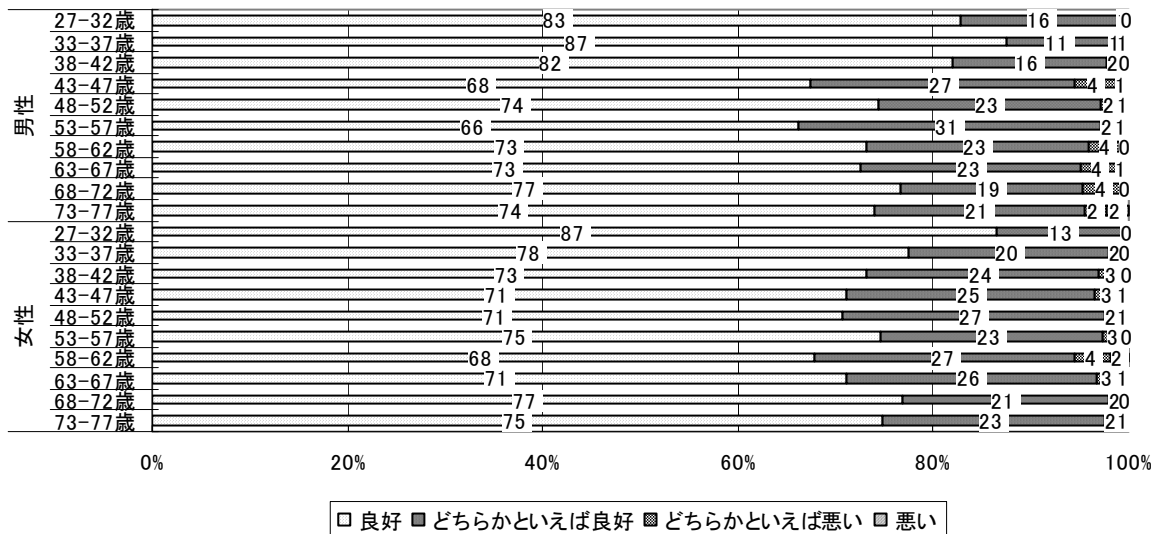


図 8-83 第1子との関係評価

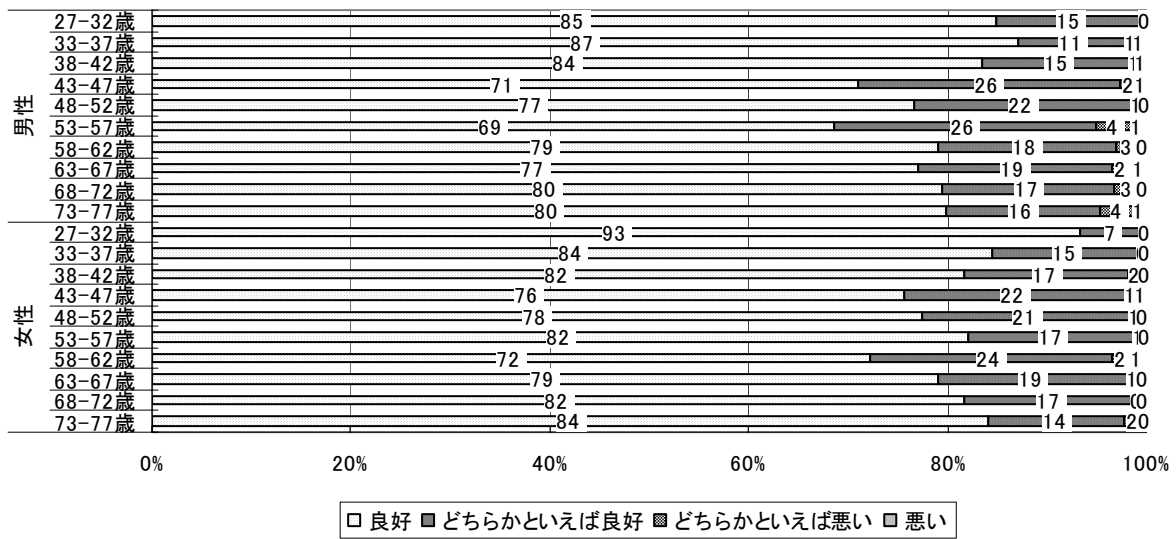


図 8-84 第2子との関係評価

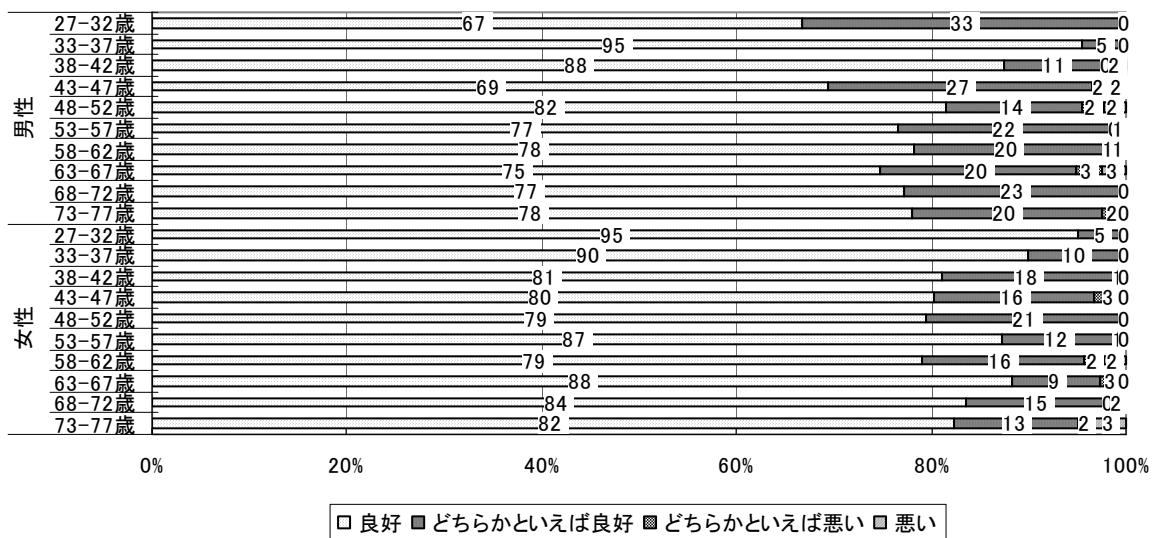


図 8-85 第3子との関係評価

### 8-5 小括

子どもとの関係について男女で大きく異なることがわかった。第一に、育児期、教育期において、男性の子どもとの接触の少なさが顕著にあらわれていた。「一緒に遊ぶ」、「知識や技能を教える」、「一緒に夕食をとる」に関して、いずれも男性回答者の頻度は女性回答者の頻度より少なく、そのような男女の違いは育児期、教育期にかかわらずほぼ存在していた。

また、子どもに対する回答者のしつけ・養育態度についても男女の違いは明確にあらわ

れていた。対話的、受容的しつけ・養育態度に関しては、女性の方が子どもの年齢にかかわらず、子どもによく話しかけ、子どもを理解しようとしていることがわかった。子どもの自立を促すようなしつけ、子どもを統制しない養育態度としてとりあげた「子ども自身に物事を決めさせること」に関しては、つまり子どもの自立に積極的に関わることで達成しようとする事に関しては、女性の方がその傾向は強く、男性の方が「まったくない」とする割合は高かった。逆に「子どもが希望するまでは何もしないでおくこと」という消極的な関わりとも考えられる項目については、男性の方が「よくある」とする割合がわずかに高かった。

ネグレクト、身体的虐待、心理的虐待に対応させた虐待的な傾向を持つ養育態度については、「怒って、子どもを押し入れや浴室に閉じこめたり、家の外（ベランダなど）に出すこと」を除けば、女性の方が行う頻度は高かった。現在の状況では女性、つまり母親の方が男性つまり父親に比べて子どもと過ごす時間は圧倒的に長く、また、子育てにより深く関わっているために、対話的、受容的しつけ・養育態度にしても、自立促進的、非統制的なしつけ・養育態度でも積極的な関わりは女性の行為の頻度が高く、消極的なものは男性の行為の頻度が高いという結果になったのであろう。虐待的傾向も、男性よりも女性の行為の頻度が高いのは、子どもと過ごす時間の長さや、子育ての責任・負担感の違いから来るのではないかと考えられる。

第二に、女性と比較すると、教育期以降も男性と子どもとの間に相互作用が少ないことがわかった。「話らしい話」をする頻度は男性の方が女性よりも少なく、子どもとの金銭以外の援助の授受も少ないのである。男性は子どもに金銭的な援助をする割合は高いが、子どもからの金銭的援助を受ける割合は女性が受ける割合よりも低い。

各変数の分布をみているにすぎないので、変数間の関係をみななければ正確にはわからない。また、親からみた子どもとの関係であることも考慮しなければならないが、女性と子どもの間には双方向に援助の関係が成り立っているのに対して、男性は金銭的な援助それも親から子への一方的な援助しか成り立っていないようだ。男性に援助するのは妻である女性であり、ここでも男性は稼得役割が中心であるとすれば、家族内の相互作用の中心的役割は女性が担っているのだろう。